

# 文化と交流

No.3 / 2014年6月

特集 地域と博物館・資料館



周防大島文化交流センター

表紙写真：「古写真の風景をあるく」調査

目次

【特集】地域と博物館・資料館	1	
・地域と博物館・資料館の連携について考える―写真巡回展を通じて―	山根一史	2
・地域交流員制度の出発―文化交流の担い手	高木泰伸	11
・久賀写真展 「昭和三十年代の久賀と現在」を終えて	徳毛敦洋	20
【論考】		
・宮本常一の足跡をたどる―呉市倉橋町	佐竹昭／道岡尚生	28
・古写真の風景をあらく―浮島所感―	山根一史	51
【コラム】周防大島の窓		
・蜜蜂と時の狭間を浮遊する	舛田良樹	61
【書誌紹介】		
渡辺尚志『百姓たちの水資源戦争』／和田竜『村上海賊の娘』		64
【活動記録】		
・周防大島文化交流センター日誌（平成二六年一月～四月）		67
投稿規定		（裏表紙）

## 「特集 地域と博物館・資料館」にあたって

周防大島文化交流センター

周防大島文化交流センターは、本年五月で開館十周年を迎えました。また十月には、大島・久賀・橋・東和の四町の合併、周防大島町の発足から十周年を迎えます。

本センターは、この十年、地域の皆さんの多大な協力のもとで運営されてきました。そこで、この十年周年という節目の年にあたり、いまいちど地域における博物館・資料館の役割とは何か、地域とどのように連携していけばいいのかを考えてみたいと思います、本特集を企画いたしました。

山根論文は地域の皆さんと協力して作り上げた公民館の巡回展示の事例を紹介しています。高木論文は文化交流センターを気軽に使ってもらうための制度づくりと展望について述べています。さらに今回は八幡生涯学習のむらの徳毛氏よりご寄稿をいただきました。地域の方の協力があつてより充実した企画展示ができた過程が述べられています。

いま日本各地の博物館や資料館は岐路に立たされています。入館者の伸び悩み、運営資金の逼迫により、館を閉じる例も少なくありません。三つの論考に取り上げられた事例はいずれもささやかなものですが、明確な展望をもった企画の積み重ねによってのみ地域の方々から信頼される資料館・博物館になるのではないのでしょうか。高邁な博物館の理想像を語るだけでは、博物館・資料館の未来は開けません。そして、そのような信頼と理解なくして博物館・資料館は成り立ちえないのです。

この特集が博物館・資料館と地域との関係を考えるきっかけになれば幸いです。

## 地域と博物館・資料館の連携について考える

### ―写真巡回展を通じて―

の運営も地域の協力や参加をより重視する傾向になって  
いる。

## はじめに

### 山根 一史

二〇一四年は、周防大島文化交流センターが開館して  
ちょうど一〇周年、区切りの年を迎える。

今まで博物館・資料館といえば、「展示や研究成果を見  
る場所」という側面が強く、事実、博物館・資料館も来  
館者の啓蒙という点に最も力を注いできたといっても過  
言ではない。

しかし、近年、博物館・資料館が果たすべき役割は変  
化しつつある。これまでの展示を通じて研究成果を見る  
場所という役割に加え、人・資料・情報の交流の場とし  
てその機能が求められている。従来、地域住民が展示解  
説や受付スタッフ・清掃スタッフのようなカタチで博物  
館・資料館に関わる例はよく見られた。しかし現在は、  
さらに一步踏み込んで、資料収集や展示、研究活動のよ  
うな専門性の求められる分野にも地域の方々が携わるケ  
ースも見られるようになってきている。このように、館

これらの動きを踏まえた上で、開館一〇周年を迎えた  
当館は、これから地域の方々とどういう関係を築いてい  
くべきなのであるか？また、地域の方々はどのよう  
に当館と関わっていけばよいのだろうか？一朝一夕で答え  
が出るような簡単なテーマではない。

今年度に入って、地域住民の方より宮本写真を使った  
展示会を開きたいとの要望をいただいた。

そこで、三月八日に実施した西方、四月五日に行った油  
宇の二度の写真巡回展の企画から開催に至るまでの経緯  
を紹介し、地域の方々と当館との在り方について考えて  
みたい。

### 西方のコミュニティカフェにて

「三月八日に集会所で地区有志（＝西方を元気にした  
い会）が主催するコミュニティカフェ（＝おいしいコー  
ヒーを飲む会）で宮本さんが撮影した西方の写真を展  
示することはできないだろうか？」

二月のある日、交流センターを訪れた橋本正人さん

(昭和一八年生まれ)の呼びかけによって始まったのが今回の取り組みである。早速、会場となる西方集会所を訪れて、どんなカタチで写真を展示するかを検討した。

会場の様子を下見した結果、今回はホワイトボード一枚(一・四メートル×一・八メートル)にA3サイズの写真八点を展示することにした。写真の選定は、まず、橋本さんに宮本が撮影した西方の写真から気になるものを何点かピックアップしていただく。それから、後日、カフェを運営される地区の方々にも見ていただき、最終的に皆さんの意見を踏まえて八点到に絞り込んでいくというスタイルをとることにした。

文化交流センターには、宮本が主に昭和三〇〜五〇年代にかけて撮影した写真がおよそ一〇万点ある。正確に数を数えた訳ではないが、中でも生家のあった長崎を含む三ヶ浦(下田・長崎・西方)の写真は他の地区と比べても格段に多い。宮本が故郷・周防大島について取り上げた代表的著作でもある『私の日本地図9 周防大島』<sup>「※」</sup>にもその特徴が現われている。およそ二六〇頁で構成される本文のうち、「ふるさとの村」の部分は実に七〇頁近くを費やしている。そこで使用された写真も西方

の集落景観に始まり、三ヶ浦のシンボリックな真宮島、お宮の森といった自然景観。下田八幡宮、神宮寺、眷龍寺、服部屋敷といった社寺・古建築。地区の古老や田植えにいそしむ人々、埋め立ての進む生家裏の海辺など、丹念にカメラに収めている。

西方は筆者にとってもなじみの深い土地である。三月二一日の弘法市の露店で鯛焼きやドングリ飴を買うのは小学校時代の楽しみであったし、中学生の時は地区を通る道が通学路だった。

二月一七日。橋本さんが来館し、写真の選定作業に入った。事前にこちらで選定した三ヶ浦の写真は全部で一六八枚。それを一枚一枚、橋本さんに見てもらいながら展示したい写真の候補を挙げていってもらった。選定作業中、しばしば手が止まる。「この写真はどこを撮ったもの?」「写真の隅に写っているのは東部病院(現東和病院)?病院が出来たのはいつ頃だったっけ?」「今の町民グラウンドは昔池だったんよ」。橋本さんと話し合う中で、写真にまつわるエピソードや疑問点が次々湧いてくる。

昨年五月にセンターに赴任してから、幾度も宮本写真に接してきたが、写真一点一点と丁寧に向き合ったのは



【写真1】城山の畑と麓に広がる水田

ている。私にとってこの通学路は通い慣れた道であり、周囲にみかん畑がある光景が当たり前であった。宮本写真を見れば、四〇年以上前、通学路沿いはまだ水田であったが、みかんの幼木が植え始められている様子もうかがえる。私からすれば、ま

今回が初めてだったかもしれない。写真を眺めていて、最も私の印象に残ったのは城山の山麓付近の様子を捉えた写真である「写真1」。昭和四三年（一九六八）三月頃に撮られたもので、写真右側には城山の山裾が写り、山裾に沿うように道がある。道沿いには水田が広がる。私が気になったのは、この写真が中学生時分に自転車を通った通学路を写したのではないかと思っただけである。橋本さんにもご意見を伺うと、恐らくそうではないだろうかとおっしゃられていた。この道は、船越・外入と西方をつなぐ道で、現在、道の両側にはみかん畑が広がっ



【写真2】写真選定の様子

その一つが撮影地の特定である。『私の日本地図9 周防大島』の二七頁に「地侍の家」というキャプション入りの写真が掲載されている「写真3」。この写真は、昭和三年（一九五八）頃に撮られたもので、これまで服部屋敷を写したものだと思われていた。服部屋敷とは、幕末から明治期にかけて西方において力のあった地

さに水田から見慣れたみかん畑の風景に切り替わる時を捉えた一枚であった。

それから、約一週間後の二月二五日。西方集会所に地区の方々八名が集まっていただいた。事前に橋本さんによってピックアップされた写真は四四枚。A4サイズに引き伸ばしたものを一枚一枚見ていただく「写真2」。「懐かしい」「ウチが写ってる」「あの時はこうだったね」。写真の前にされた皆さんたちの間で思い出話に花が咲く。しかし、集まった方々にとって他愛もない話であってもその中から思わぬ事実が分かることもある。

侍・服部家の屋敷のことである。参加者の野原和夫さん（昭和一三年生まれ）が「これは昔のウチの写真だ」とおっしゃられたことで、この写真が野原家を写したものであることが判明した。『東和町誌』には「地侍は西方に服部・野原・永見（中略）がいた」<sup>※2</sup>と記されている。どうやら野原さんは、西方の名家・野原家の末裔にあたるられる方の方である。

門井良子さん（昭和三年生まれ）からは、西方での米作りについて貴重なお話を伺うことが出来た。かつて西方では、田植えは六月末から七月にかけて地区の人々で

協力して行い、稲刈りは一

○月末から一月にかけて家ごとで行っていたという。一般的に、田植えは四月末から五月頃、稲刈りは九月から一〇月頃にかけて行うものである<sup>※3</sup>。この話を聞いた時、田植えや稲刈りの時期が一般的な感覚と比べてずいぶん遅い印象を受

けた。もちろん、地域や地形、気候、米の品種、年ごとの気象条件など様々な要因によって米作りの各工程の時期が全国一律でないことは当然である。調べてみないことにははっきりと言えないが、田植えや稲刈りの時期も西方のある東和地区でも地区ごとによって違いがあるかもしれない。さらに広げて大島郡内、山口県内…のように対象地域を広げて比較するとより違いが顕著になるのではないだろうか。それらを相互比較することで東和地区や大島という地域の特性について考えることが出来ないだろうか？ 門井さんのお話からは、そんな発想も浮かんだ。

最終的に地区の皆さんが選ばれたのは、集落景観三点、水田風景二点、みかん畑一点、服部屋敷一点、弘法市の露店風景一点の計八点となった。写真八点のレイアウトも皆さんで考えていただいた。中でもこだわられていたのは、水田風景二点とみかん畑一点のレイアウトである。前者は、二枚一組で昭和三三年（一九五八）六月頃に撮られたもの。後者は、昭和四三年（一九六八）三月頃のものである。どちらも、ほぼ同じ地点を撮ったものであるが、水田とみかんの幼木というように被写体が大きく



【写真3】西方の地侍だった野原家

異なる。土地利用の変遷がよくわかるよう、これら三点は上下二段に並べて展示したいとのこと意見であった。

三月六日。ホワイトボード一枚と先日地区の皆さんで選ばれた写真八点を手に、再度、集会所を訪れた。写真はA3サイズに引き伸ばしたものを写真用紙にプリントし、アルミフレームに入れたものを持参した。事前に、ホワイトボードを設置する場所を整理していただいております、写真のレイアウトも決まっていたので展示準備はスムーズに行えた。この時、橋本さんも立ち会われ、展示準備の様子も見えていただいた。



【写真4】 コミュニティカフェにて

肝心のカフェ当日の三月八日は、業務の都合上お伺いすることができなかつた。しかし、後日、橋本さんが来館され当日の様子を語ってください、この時撮られた写真もご提供いただいた。

会場は花で飾られ喫

茶店の雰囲気ただよう中で、おいしいコーヒーの入れ方教室や団らんで楽しいひとときが過ごせたとおっしゃられていた「写真5」。会場には地区内外で一五人の方が来られたという。

橋本さんのお話によれば、宮本写真も大いに会を盛り上げるのに一役買ったとのことであった。普段寡黙な方も写真をご覧になると、多弁になり、写真にまつわる思い出やエピソードを語られる光景も見られたという。つづく現場に居合やすことが出来なかつたのが残念であるが、提供いただいた写真からでも、宮本写真を前に



【写真5】 写真を見つつ会話も弾む

話題が盛り上がっている様子が十分に伺える「写真5」。

最後に以下のお話を付け加えておく。写真をご覧いただいた際、皆さんからは「西方のどこを写したのかよく分からないものもかなりあった」との感想が聞かれた。後

日、皆さんで集まられた折には「機会があれば、一度みんなまで写真を手に現地を歩き、宮本が撮影した場所を探し、現在の様子をカメラに収められたらいいね」という意見も出たという。写真展を通じて地元への興味・関心がより深まり、新たな活動へとつながる。地区の方々にとって今回の取り組みがそういうきっかけになれば幸いである。

### 油宇の公民館にて

さて、西方集会所で写真展をやったことで、橋本さんと親交のある油宇の福田忠邦さんにも関心を持っていた。油宇の公民館でも展示を試みたいとの話をいただいた。油宇の公民館には宮本常一の写真が一枚飾られている。これは、企画展示の際に制作した写真で、しばしば交流センターを利用してくださる福田さんを通じて公民館に寄贈した。その写真は昭和四一年に嶽山と油宇の集落を撮影した航空写真であった。この他にもいい写真がたくさんあることをお伝えしていたので、今回の展示企画にも興味を持って下さった。

福田さんの話は、四月五日に開催する油宇老人クラブ

総会・懇親会にて展示したいことの提案であった。お話をいただいたのが三月に入ってからで、西方集会所で実施した時のように聞き取り調査などもできそうになかった。そこで、福田さんが写真の選定をすることにして、現地を確認したり、必要なことを地元の方にも聞いてみたいということになった。

筆者と高木の二名が会場である油宇公民館を訪ねて、展示スペース、会場設営を福田さんとともに検討した。油宇公民館は予想以上に広く、西方集会所の時よりも多くの写真を展示することが可能だという認識を共有できた。また油宇公民館には二階席や座敷の部屋などもある。演劇場のような雰囲気や宮本常一の写真展示にはぴったりのように思えた。館内を実測して、展示ボード四枚の設置が可能で、西方集会所と同じようにボード一枚にA3サイズの写真を八枚、合計三二枚を展示することにした。

そこで、まず交流センターで宮本常一データベースから油宇関係の写真一一七枚を抽出して、福田さんに見てもらうことにした。今回の確認作業で、昭和二〇年代の油宇の浜や集落景観の写真があることがわかった。これ



【写真6】 展示写真を選ぶ

は宮本の著作『私の日本地図 9 周防大島』にも掲載されておらず、未発表のものでもある可能性が高く、貴重な資料であることがわかった。浜上げされた木造漁船が海岸線を埋める風景に、福田さんも「こんな風景があったんじゃねえ」とたいへん感動されていた。

選定中は、「これもええねえ、これもなつかしいねえ」と福田さんの昔話に花が咲く「写真6」。航空写真が割合多く、山頂まで耕された写真には先人たちの努力に頭が下がる思いがこみ上げてくる。

の思い出が出て来る一方、「あれ、この井戸はどこじやろうか」と確定できない写真もある。そこで、場所などが未確定の場合でも地域の皆さんに見てもらって場所を確定しようということになった。またそういった不確定



【写真7】 展示設営する福田さんと筆者

な写真もあるので、キャプションは撮影の年月のみを記すことにした。

あれもこれもは入り切れないから、福田さんも断腸の思いで展示したい写真を省かれたことと思うが、何とか三二枚の写真を選定が終わった。

四月四日。プリントアウトした写真と展示ボードを油宇公民館へ搬入した。福田さんも地域行事で忙しい中、時間を割いて一緒に展示作業に従事してくださった「写真7」。西方で展示したときと同じく、福田さんが事前に写真の配置を考えて下さっていたので、スムーズに展示作業をすすめることができた。

四月五日。老人クラブ総会の会場に足を運んだ。この日は文化交流センターで学芸員実習をした隅杏奈さん（神戸大学大学院生）が、友人の松井今日子さん（芸北民俗芸能保



いるかを知るよい機会であったと思う。展示に協力・参加していただいた方や巡回展に来ていただいた方の反応を見る限り、ある程度満足していただけに思っている。

我々、交流センターサイドにとつても、有意義な取り組みであった。地域の方が、宮本写真についてのよい印象や感想を持たれるのか、身近で感じられたことはもちろん、センターにどういった資料があるのかを知っていたかどうかではないかと思う。

本年二月に当館で講演していただいた高橋啓一氏（滋賀県立琵琶湖博物館・上席総括学芸員）によれば、琵琶湖博物館では館内の一画を地域住民の方の展示スペースとして開放しているという。展示内容や解説も住民の方の自主性に任せ、博物館からのアドバイスは最低限にとどめているとのことであった。この取り組みは、住民の方が積極的に館の展示に関わることで、博物館への愛着もわき、しいては博物館の活動について理解していただける画期的なものだと思われる。

今回の巡回展と高橋氏のお話から、これからの博物館・資料館と地域との関係について漠然ではあるが一つ

の方向性が見えてくる。それは、「見て学ぶ場所」から「利用・活用してもらおう場所」へということである。文化交流センターに保存されている資料は、決してセンターだけの所有物ではない。大島に住まれる皆さんの共有財産である。今回の取り組みのように、地域の方々はその存在を知っていただき、もっと活用されてこそ意義があるのではないだろうか。当館としても可能な限りそれらの要望に応えられる施設でありたいと思う。

（文化交流センター学芸員）

〔脚注〕

※1 宮本常一著『私の日本地図9 周防大島』（未来社、二〇〇八年）

※2 宮本常一・岡本定著『東和町誌』（山口県大島郡東和町、一九八二年）五〇頁

※3 志村隆編『くわしい！わかる！図解日本の産業1 米』（学習研究社、二〇〇六年）八〇九頁

〔付記〕 本稿で使用したモノクロ写真は全て文化交流センタ

ー所蔵の宮本常一撮影写真で、カラー写真は筆者と高木の撮影したものと、西方を元気にしたい会よりご提供いただいた。

## 地域交流員制度の出発―文化交流の担い手

高木 泰伸

はじめに

資料館や博物館の役割は「あつめる、しらべる、つたえる」という三つの機能に集約されるのではないかと思いついたのは三年ほど前のことだった。

「あつめる」というのはコレクションとなる資料や、参考となる情報を収集することである。資料館や博物館にはそれぞれにコンセプトがあり、そのコンセプトに沿っているいろいろなものを収集しコレクションにしていく。文化交流センターの場合、農林水産業を中心にした暮らしの変遷のわかる民具や図書、文書、写真を集めていくことになる。そして暮らしの変遷に関わる情報も聞き書きなどによって収集していくことだ。また、このような調査研究、体験学習に関心がある人たちが「集まる」場としても機能しなくてはならない。

「しらべる」というのは、収集した資料や情報を精査するということである。資料や情報がただあるだけでは、それ自体がどういった価値をもっているのかわからない。たとえば、木造漁船があつて、それで漁業をいとな

んでいたことはわかってても、どういった魚種をとっていたのか、出漁範囲はどれほどだったのか、どこで作られたのか、他地域との形状の違いはあるのか、といった様々な疑問を解決していかなければならない。

「つたえる」というのは、収集・調査した内容を広く公開して、多くの人びとが共有できるようにすることである。展示や論文などで公表することが先ず考えられる。また道具を使う学習会や現地を実際にあるく巡見のような体験学習という方法もある。同時に「伝承」という意味も込めている。歴史のなかで培われてきた技術や工夫を次の世代に伝えていくという大切な役割である。

さて、この「あつめる」「しらべる」「つたえる」の活動を企画する担い手が学芸員である。しかし、一次産業を中心とした生活文化、自然環境をテーマとする文化交流センターの場合には、学芸員だけでは、どうしてもその全体をカバーするには限界がある。できることなら地域の人たちが一緒になって文化交流センターの活動に参加してもらえないだろうかと考え、平成二四年度から周防大島文化交流センター地域交流員という制度を設け

ることとした。本稿では、この地域交流員の制度をつくった際の考えを述べ、さらに現在の活動と地域と連携した実践の成果を記してみたい。

## 一 基礎となる「宮本常一」という存在

周防大島出身の民俗学者・宮本常一は生前に民具収集とそれをもとにした博物館の創設にたずさわった。周防大島では久賀歴史民俗資料館の設置や東和收藏庫所蔵の民具収集を指導した。また晩年には東和町郷土大学を開講した。この開講記念講演のなかで宮本は、「大事なことは規格化されることなく、みんなが企画し、お互いがお互いに発見していくことである。その発見していく一番大事なことになることは何であるかと、やはり自分が今住んでいる場を、その生活の場をもとにしてその中から新しい生き方を見つけていくことです」(1)と述べ、故郷の人びとが自らの住む地域を通じて連帯感をもつて学ぶ必要性を説いている。

宮本の考え、そして所蔵する宮本常一関係資料は、周防大島文化交流センターのさまざまな企画の中核にある。そのため、交流センターは宮本常一を知るための施設と

して注目され、宮本常一に関心のある利用者が多い。しかし、宮本常一の残した史料や著作を読んでいると、「ワシのことはええけど、あんたは何をやるんじゃ？」と問われているような気がしてならない。そして、文化交流センターは資料を保管し宮本常一を知るための施設としてだけ機能してはいけけないのではないか、宮本常一資料は彼が日本全国を調査した貴重な記録であり、これをもとにして自らが住む地域をみんなで考えるような取り組みをしていかなければ、宮本常一に叱られるのではないかという思いがこみ上げてきた。そして、宮本常一の手法や考えを受けつぎながら、「みんなが企画し、お互いがお互いに発見していく」「自分が今住んでいる場を、その生活の場をもとにしてその中から新しい生き方を見つけていく」という宮本のメッセージを受け止め、具体的にどのような活動を展開したらよいのかと考えるようになった。

## 二 周防大島は人間の営みが詰まった宝箱

周防大島は古くからの人の営みがあり、また豊かな自然に恵まれ、まさに掘っても掘っても枯れることのない

魅力がある。それはまさに宝箱に詰め込まれた資源がある。そして、暮らしの形を残そうと民具をはじめとした資料収集がなされていて、さらにそういった人びとの営みに関心を持った人がいたのも有難いことだった。

また周防大島には、農業や漁業など自然に寄り添って暮らした時代に生きた人たちも多く、まさに生活実感をもなった人的資源の宝庫とも言える場所である。この人たちは実に誠実であり、子どもたちの体験学習にも非常に協力していただいております、自らの経験で培われた知識や技術を余すことなく教えてくださっている。

こういった人びとには日常的に出会う機会も多かった。文化交流センターを訪れる人から、いま周防大島の歴史について調べている、石造物に関心があるなど様々なフレアレンスを受けることがあり、自らの経験や祖父母から聞いた話などを聞かせていただいた。さらに、いま周防大島町が推進している体験型修学旅行のインストラクター研修会では周防大島の海や山、ここで培われた知恵や技術を生かした青少年の育成に心をよせる人たちの話を聞くことができた。文化交流センターが、このような人たちが集り、「みんなが企画し、お互いがお互いに発見

していく」場にするための制度設計が必要だと感じた。

### 三 いろいろな博物館のさまざまな取り組み

しかし、ただ人が集まるだけでは活動は尻すぼみになるのは目に見えている。全国の博物館や資料館ではボランティア制度があり、友の会の会員が活動していて参考になる事例が多かった。そのなかでもとりわけ参考になったのが、萩博物館と琵琶湖博物館の取り組みだった。

萩博物館を運営するNPO法人萩まちじゅう博物館は「学芸員サポート」事業が設けられており、市民が博物館活動の重要な担い手になっている。天文班、生物班、あい班、歴史班、レコード班、古写真班、民具班の七つのグループ活動が展開されて、調査や資料整理、体験学習、企画展示に市民が主体的に参加している<sup>(2)</sup>。

このうちの古写真班の方々と宮本常一写真の貸出を通じて交流する機会が多く、具体的な取り組みについて参考となる点が多かった。古写真班の方々は萩市街地、見島・相島・大島、阿武川流域など昭和三〇年代から撮影された写真の調査、博物館写真コレクションのデータベース化や、写真の収集にも力を注いでいる。八〇歳を超

えてパソコン操作を覚えて数万枚の写真のデジタル化、データベース化をやったという方がいらつしやったのは驚いたが、とにかく皆さんがいきいきと活動されているのが印象的だった。そのなかで『出来る人が、出来ること、出来る時に』というのが長く継続して楽しく活動するための基本です』と話して下さった。

琵琶湖博物館では、「使える博物館」「いつでもどこでも博物館」をコンセプトに<sup>(3)</sup>「はしかけ」「フィールドレポーター」という制度を設けている。「はしかけ」というのは、もともと滋賀県の方言で仲人など人をつなぐ人のことで、地域と博物館をつなぎ博物館活動を通じて人の交流をめざすという意味で作られたという。古民家や民具を利用した体験会を主とする「近江昔暮らし倶楽部」、琵琶湖地域の化石発掘を主とする「古琵琶湖発掘調査隊」など幅広いテーマで一六のグループが活動している<sup>(4)</sup>。学芸員がアドバイザーとなつて市民が自主的に運営する観覧会、体験学習会を実施している。「フィールドレポーター」は琵琶湖周辺の自然や暮らしについて、身の回りで調査を行い、その結果を定期的に博物館に報告する制度でアンケート調査の協力などが主であるとい

う<sup>(5)</sup>。前者の方が博物館活動により密に関わつているが、両方に登録されている方も多いという。琵琶湖博物館を訪ねた折に、「はしかけ」を長年にわたり続けられてる方に話をうかがうと、タンポポ調査やいろいろの活動が博物館を支えていることに生きがいを感じているということだった。

菟博物館と琵琶湖博物館ともに共通しているのは、博物館の活動が館のなかで完結しておらず、一定のフィールド(菟、琵琶湖)を舞台にして展開されていることである。そして来館者が博物館活動への積極的に「参加」し、刺激し合いながら「交流」し、その活動に「やりがい」「生きがい」を自ら見だされている点であった。「参加」と「交流」、そして「やりがい」「生きがい」(言い換えれば発見の楽しさ)というのがキーワードになると思つた。

#### 四 仲間を「あつめる」——地域交流講座の開講

文化交流センターへの市民参加を募るにあたり、「ボランティア」という言葉をつかいたくないという議論があった。「ボランティア」は「有志」という意味であるが、

現在は「奉仕」という意味で使われることが多い。参加した人が企画に沿ったことを義務的にやるのではなく、最初はメニューを用意するにしても、ゆくゆくは企画の立案過程から考えてもらおうようにしなければならないということがある。そこで、センターと地域をつなぐということで「地域交流員」という名称にすることにした。

そして、宮本常一写真の調査(6)や体験学習会の開催など地域の人たちに参画してもらおう事業の大まかな展望ができた時点で、文化交流センターの設置目的を十分に理解していただくことが大事だということになり、平成



地域交流講座を受講した皆さん

二四年度から研修会である「地域交流講座」(全四回)を開講することにした。講座の内容は、①文化交流センターの設置目的と地域交流員の趣旨説明、②他の資料館・博物館の活動事例、③フィールドワーク講習、④参加

者の課題報告の四回を実施した。

このうち好評だったのはフィールドワーク講習である。道の駅サザンセト東和に隣接する農村交流伝承館(服部屋敷)をスタートし、真宮島付近の渚、さらに下田八幡宮、眷龍寺をめぐる約二時間コースで、宮本常一が昭和三〇年代に撮った写真を片手にあるいた。宮本写真を持つてあるくことで、日常の風景にも目を向けてもらうという意図があり、土地利用や埋め立てによる景観変遷を感じてもらおうことができた。一方で、①と②の講習は内容が重複する部分も多く講座の内容を変更する必要があ



地域交流講座・フィールドワーク講習

った。また④の受講者発表会では明確な目的を持っていて人とそうでない人に差があり、また発表というスタイルが参加者に過度の負担になっているようだった。

以上の反省を踏まえ、この平成二六年度か

らは①と②を一回にして趣旨説明の時間にして他館の事例を提示するようにし、③のフィールドワーク講習をやった後で、④にかえて参加者の意見交換を座談会形式で話すという二回の講座にすることにした。これによって、上半期（六月、七月開講）と下半期（一〇月、十一月開講）の年間で二度募集することができるというメリットも生じることになった。

この「地域交流講座」を受講して、地域交流員登録書を提出していただく手続きをとれば、交流センターの展示室への入館を無料とし、またセンターの施設・機能を使って自分のやりたい体験学習や、展示を実施することが出来るようにした。また月に一回、情報交換や活動・調査の報告をする「地域交流談話会」を開催するようにした。そして学芸員はそれぞれの活動のサポートにまわるように企画した。

平成二四年度に地域交流員養成の地域交流講座を実施し一六名の方が受講され、一五名が登録、翌二五年度には五名が受講して二名が登録、現在一七名が交流員として活動している。仕事の都合や家庭の事情などで受講を中断されたり、登録を断念されたりする方もいた。しか

し、地域交流講座を通じてあまり知る機会のないセンターの設置目的や活動を知る機会になったとの感想が聞かれ、地域の方に講座を受講してもらっただけでも意義あることだと思っている。

## 五 地域交流員の活動と課題

地域交流員が実際に活動をはじめたのは平成二五年度からで、個人単位での活動を基本に考えつつ、やりたい活動の類似する人たちによるグループを作ることにした。また、センターとしても取り組んでもらいたい事業があり、何をやるうかと迷っている人へ選択肢の幅を広げるためにも以下のグループを設けて検討した。

①「海里山発見伝」：自然環境、人の暮らしを調査するグループ。長州大工の足跡調査や、水質調査、漂着物調査を企画する。

②「古写新くらぶ」：写真資料の収集・調査の推進。特に宮本常一写真の現地調査を行うなどする。

③「暮らしの文化体験団」：民具を使った体験学習や農業体験を推進する。

④「資料あつめ根子の手隊」：文書や民具などの資料を収

集・整理する。

地域交流員に登録したほとんどが、いずれかのグループに所属することになったが、人数が少ないこともあり、グループごとの活動というよりも企画ごとに活動しているというのが現状である。登録者が増えて、いろいろな企画が出てくれば、それぞれの専門の場を設けてもらうことが必要になるだろうが、当面は企画単位で参加してもらうことになるだろう。

さて、これまでに実施した地域交流員が主体となった企画をいくつか紹介しよう。日本写真協会に所属している



サツマイモ掘り体験でも交流員が活躍

の方が呼びかけて、東京写真月間が企画する「一〇〇〇人の写真展」に「私の好きな周防大島」のテーマで出品した。写真が一〇枚以上も集まればその地域の姿が見えてくるし、東京のど真ん中で周防大島のアピールもでき

るからやってみよう、写真に親んでもらおうというコンセプトで参加者を募り、平成二五年に三二点、平成二六年に二四点の作品を東京へ送った。また返却された作品は三月に開催した「東和図書館室まつり」に一コーナーを設けて展示した。本年も返却された作品を展示する予定である。

本年一月には体験学習として「ダイガラを使った餅つき体験」を開催した。親子での参加を呼びかけて実施した。地域交流員のアイデアでカマドに火をつけるときにはコツパ（松葉）を使うようにしたし、交流員の一人が火吹き竹も用意して下さった。ダイガラを使った杵搗き餅は機械搗きとはひと味違う。大豆を石臼で挽いた黄粉は香りもよく好評だった。一月の寒いなか野外での開催だったが、朝から多くの人出があった。カマドの熾火で餅を焼きながら談笑し、いろいろの意見交換もできて交流員間の懇親の場にもなった。

また、昨年十一月からおよそ月一度、「古写真の風景をあるく」として宮本常一が撮影した写真の今を巡る企画を続けている。昨年から浮島、久賀、和田、伊保田、両源田、外入、船越の各集落を歩いた。宮本常一の撮影場



地域交流談話会にて

所やその写真から得られる暮らしの経験を探るのが主な目的だが、撮影場所を探す中で普段は見落としがちな史跡や神社仏閣の彫刻、めずらしい植物などを毎回見つけている。そして、この調査報告を翌月の「地域交流談話会」でするようにしている。

「地域交流談話会」は先に述べたように、情報・意見の交換の場として月に一回第二日曜日に開催している。午前中の一時間半を予定して開催しているが、毎回活発な意見交換があり、一時間半で会が閉じることはほとんどない。古写真に関する報告の他には、長州大工（神社・

仏閣建築）の報告、街道ウォーキングの参加報告、大島の漂着物や周辺の水質に関する報告など多種におよび、またこれまでに石風呂や民具に関するDVDを視聴して企画実施の参考をしている。現在、学芸員がこの談話会の

司会と報告者の選定をしているが、活動が徐々に蓄積されてきたので、今後は交流員自らがこの「地域交流談話会」の運営も担えるのではないかと思っている。

さらに、活動を「伝える」ためにもこの『文化と交流』の発行が大きかった。ともすれば実施して終わりになりがちな活動も記録しておくことで、企画の反省もすることができ、今後の参考にもなる。記録することが文化の蓄積になり、活動の厚みに繋がっていくのではないだろうかと期待している。

#### おわりに

周防大島にはまだまだたくさんさんの「宝」がある。その「宝」は身近にあるがゆえに見えにくく、その価値付けをしなければガラクタのままである。地域に住む人がその価値を見出さなくてはならない。ちよつとした疑問が「発見」のヒントになっていることに期待したい。そのためにも、文化交流センターを、そして我々学芸員をもっと気楽に使って欲しいと思っている。使ってもらうことで我々も視野を広げてもらい、学びの機会にもなっている。

「学芸員」は「楽迎員」。開館一〇周年を迎えた周防大島交流センターへ、地域交流員の方々と一緒に「発見」の楽しさを今後ますます迎え入れることが出来ればと思っている。

そして、発見の成果をまとめて「しまじゅう博物館マップ」のようなかたちで周防大島の魅力を伝える地図づくりはできないだろうかと考えている。その参考になる先進的な事例も数多いが、それは別の機会に譲ることにしてとりあえず筆を置くことにしたい。

(文化交流センター学芸員)

【脚注】

- (1) 『夢と情熱―宮本常一郷土大学開講記念講演』(東和町ふるさとづくり実行委員会、一九八七年)、六頁。
- (2) NPO法人萩まちじゅう博物館ホームページ  
<http://www.npomachihaku.com/bukai.htm#rikujou>
- (3) 琵琶湖博物館『「使える」琵琶湖博物館をめざして』(シンポジウム報告書、二〇〇三年)  
琵琶湖博物館ホームページ  
<http://www.lbm.go.jp/hashikake/index.html>
- (4) 琵琶湖博物館ホームページ  
<http://www.lbm.go.jp/fieldrep/index.html>

- (6) 地域交流員の設置に先立って平成二二年度から参加者を募り「古写真の風景をあるく」という古写真の現地調査を行った。拙稿「宮本常一写真の社会活用」『比較日本文化学研究』六、広島大学大学院文学研究科総合人間学講座、二〇一三年) 参照。
- (7) 柳原一徳「私の好きな周防大島」をテーマに東京写真月間「一〇〇〇人の写真展」に出展『文化と交流』2、二〇一四年

## 久賀写真展「昭和三十年代の久賀と現在」を終えて

徳毛 敦洋

### はじめに

本稿は平成二六年一月一三日より三月三一日まで八幡生涯学習のむら・町衆文化伝承の館で開催された久賀写真展「昭和三十年代の久賀と現在」について述べる。著者がはじめて主になって企画を担当したわけであるが、こういう経験が少なく、久賀に住むようになって一年と経っていないので試行錯誤の連続であった。しかし、地域の方をはじめ多くの人に支えられて無事に企画展示を終えることができた。展示が終わった今、これらの経験を振り返って記録として残しておくことは自身のためにも意義あることだと思ふし、また地域とともに歩む資料館（社会教育施設）のあり方を改めて考えてみたい。

### 初めての展示担当

この企画は森本孝氏のアドバイスもあって十月頃にはすでに構想していた。だが、古文書講座をはじめ他の企画の準備などに時間をとられて、実際に展示準備をはじめ

めたのは、前回の企画展（）が終わった十二月の頭からであった。

いざ準備といっても単純な話ではない。町に提出する書類、会場の設営、写真の選定など多岐にわたる。その中でも一番苦慮したのが、写真の選定である。

赴任して約一年になるが、久賀の歴史、人びとの営みは多様であり、その奥深さによく足を踏み入れたばかりで、私一人だけでは写真から読み取れる情報も限られている。久賀を写したと思われる約一〇〇〇点の中から展示に使用する写真をテーマごとに振り分けていく作業と撮影地の比定に年内は終始した。宮本が久賀と関わりを持ちはじめて約六十年経った現在では、久賀町の景観も一変している。目印となる建物も解体・移転していたりして、当時のままのものは少ないのである。ここで、協力をいただいたのが、久賀在住の郷土史家でこの地の歴史文化に造詣の深い金本豊氏だった。町文化財保護審議委員会委員でもある金本氏に撮影場所や写っているものなど、不明な点をご教示いただいた。

そしておおまかに「宮本常一写真」、「現在との比較」をしたパネル、「学習のむら収蔵写真」と三つにコーナー分

け、さらに久賀本通り、久賀港、町並みなどのテーマに分類ことに決定した。

テーマを決めた後は、パネルにする写真のレイアウトである。展示を担当するのが初めてだから、こういったレイアウトも当然初めてである。会場に最適なパネルのサイズ、リード文のフォントなど、ここでは宮本常一写真を所蔵している周防大島交流センターの高木泰伸氏に助言いただき組み立てていった。展示物の配置などいわゆる「魅せる展示」については、森本孝氏を手伝った「船大工道具と木造船」での経験も役に立った。年が明けて



展示会場の風景

からは右記の二作業の平行であったが、学習のむらのスタッフの協力もあって、なんとか初日までに展示に足りるパネル数は作成できた。

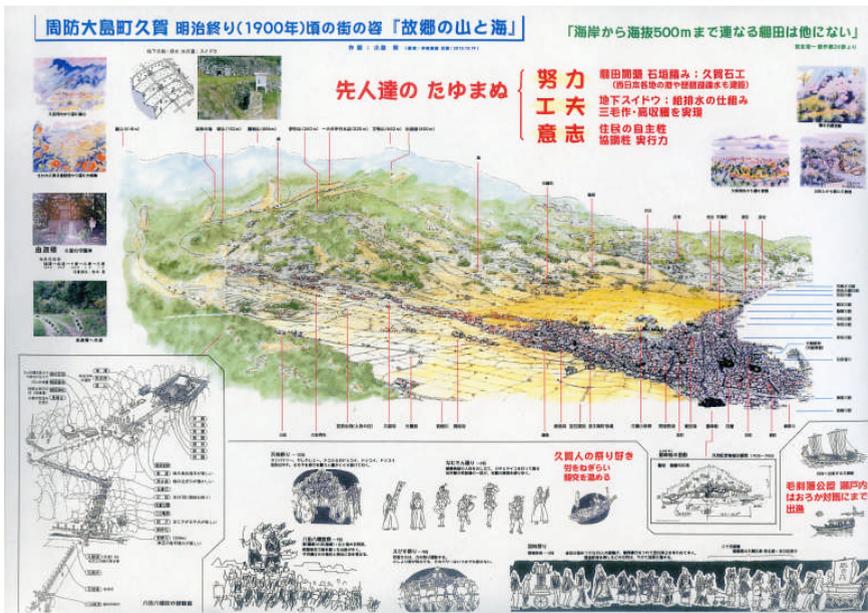
そして、展示が始まってからも新たな発見もあって追加でパネル

を増やすなどした。

宮本常一の写真は、何気ない生活の一空間を切り取ったものが多い。その何気ない風景のなかに宮本独自の地域をみる視座が含まれている。だが、パネルのリード文で宮本の民俗学者としての視点を来場者に紹介できるような文章を十分には書き得なかったように思う。今後は撮影者の意図を読み解く力、写真を「読む」能力も高めていきたい。

#### 地域の協力と各機関との連携

さて、展示がはじまった後で、の小泉実氏が描かれた久賀の棚田のイラストあることがわかった。小泉氏が描いて久賀在住の伊東康雄氏がそれに説明文を加えて展示用に作成されたものがあるという。金本豊氏から伊東氏を紹介いただき、連絡をとったところ、「久賀のためならいいですよ」と二つ返事で快諾をいただき、追加で展示する運びとなった。資料を提供していただいこともさることながら、地域のためという思いが何よりもありがたかった。このパネルは現在も学習のむらの事務局前に展示している。



小泉実氏の作画を伊東康雄氏が編集したパネル

また、宮本常一の写真には海上や港町で撮ったものもあるのだが、海上から撮った写真などは取材、場所比定が困難である。そこで船大工展の時の縁で大島中央造船所にも協力をいただいた。

金本豊氏は今回の展示の最大の協力者である。前述のように町の文化財保護審議委員会委員を長年勤められ、旧久賀町に限らず、大島全体の歴史に通じておられる。旧久賀町内の変遷、史跡などの場所特定などで随分と助けていただいた。同氏は小林表具店をされており、今年度は学習のむらで表具講座を開催していただいている。今回の展示では、こうした久賀のことを思う方々のつながりができ、地域を思う人たちの気持ちに触れることができたのが最も大きな収穫であったと思う。

また、関連イベントとして三月八日には愛知大学の印南敏秀先生、広島大学の佐竹昭先生を招き、シンポジウム「宮本常一撮影写真による瀬戸内文化の資源化」を開催した。宮本写真を題材にしながら、瀬戸内の景観の変遷を着目した研究の成果をお話いただいた。石積文化の変遷やシシガキの話など、今後の久賀にとっても示唆に富む講演であった。当日は三〇名以上の人の参加



津原川、藤屋前。宮本の写真は何気ない生活の一場面を切り取っているのが魅力だ。

者があり、パネルディスカッションではフロアから時間の足りないほどの質疑応答があつて盛会であつた。

周防大島文化交流センターの高木学芸員には、写真の貸出から、このシンポジウムの企画立案などいろいろの面で手助けをいただいた。小さな資料館の少数のマンパワーでの企画は制限が多くなるのだが、研究者や近接の文化施設と連携することで、市民の方により中味の濃い情報を提供することができるのだと実感することができた。

#### 宮本常一写真からの発見

今回の写真展に使用した資料は、宮本常一撮影の久賀に関するものと、八幡生涯学習のむら収蔵の写真群である。写真資料を取り扱うのはじめてで試行錯誤の連続だったが、私にとってはいろいろのことを考えるよい機会になった。

旧東和町出身の宮本常一は幼少時代、久賀を「あこがれの町」(3)としていた。お祭りなどで久賀によることは楽しみだったという。

昭和二〇年代の後半からは、『久賀町誌』の編纂で久賀



今も昔も変わらない石風呂と薬師堂

と縁があり、その後も民具の採集や歴史民俗資料館の建設と、亡くなるまで関わりがあった。著作によると、久賀での主な関心は棚田や暗渠といった石造物にあったと思われ、写真の三割方はそうした調査の時の写真である。他は滞在した藤屋、鶴田書店などから久賀を散策した時の写真、船や車での移動時の写真が残っている。

久賀での町史編纂事業、民俗資料館造りは、他では見られないほど、町民の協力が得られた。「民具の収集を呼びかけるとあつという間に集まって来」たそうである。自分たちの生きてきた道具などが失われていく姿を見て、

なんとかしようと思いつくと民具収集に協力したという思いからではないかと宮本は推測する。現在これらの民具は八幡生涯学習のむらの歴史民俗資料館及び諸職用具収蔵庫に納められている。

このように「自分たちの築き上げてきた文化の遺産と、それを守ってきた人々の英知」を教訓とし、反省し生かしていく久賀の人間を宮本は町衆と呼んだ。この人脈は長年続いたらしく、町を通っては呼び止められ、話に花が咲いて一泊するということもよくあったという。

劇的に様相が変わった旧久賀町であるが、宮本常一の写真の頃からあまり変化がないものがある。それは、久賀の寺社である。石風呂堂・久屋寺・八田八幡宮など、境内に若干変化がみられるものの、ほぼ当時の姿を残しており、写真比定も容易であった。変化のない性格の建物だとは思いますが、景観もほとんど変わっていないのは、信心深さもあり、こうした建物維持への久賀の「町衆」の意識であろうか。変わったものへ視点が向きがちになるのだが、同時に変わらないものの意味も今一度考える必要があると思う。

おわりに

今回の展示では、宮本常一写真以外にも、八幡生涯学習のむら収蔵の写真を使用した。旧久賀町時代にまとめられた写真資料で、町内各地域から収集し、『写真でみる久賀町』などにも使われている。明治期から九十年代初頭までの主立った久賀の変遷を追うことができる。今回は、お祭りや道路の変遷で使用した。これ以外にも学習のむらでは町制九十周年を記念して収集撮影された町内写真のネガフィルム移管を受け、現在整理をしている。一点一点をスキヤンニングしてパソコンに取りこんでいくのは根気のいる作業だが、学習のむらの菊本雅喜氏が仕事の合間をぬってコツコツとつづけている。

これらの写真資料は宮本写真とあわせて地域の変遷を知る上で貴重なものである。もちろん撮影されたものを精査した上ではあるが、写真に写り込んだ情報から新たに知りうる事実などもある。久賀歴史民俗資料館では民具・古文書などが主に保管されているが、これらだけではなく往時の様子をうかがうことはできない。民具を使っている写真、古文書に書かれてあることを実際にやっている写真など、写真資料が地域の歴史を知る上でも、その補

足資料以上のものとなりうる。写真の保存整理も、地域の博物館・資料館の重要な業務の一つと思うのである。

現在、八幡生涯学習のむらでは、企画展「周防大島の伝統芸能」を開催している。この展示では、久賀のなむでん踊り、日見の神舞など、現在に伝わる芸能をいくつかとりあげ、祭りの概要、歴史、現状などを紹介している。今度も保存会の方々や芸能に関わる人々に協力をいただきながらの展示となっているので、伝統芸能の継承への努力や地域との関わりなど、芸能の現状を知っていたければ幸いである。

また、十月には宮本常一が撮影した久賀の写真を手にと町内を回る「歴史散策」などを構想している。ふるさとに愛着をもった久賀の人たちと協力しながら、地域再発見の楽しさを共有できる企画を今後も展開していきたい。

(八幡生涯学習のむら学芸担当)

#### 【脚注】

(1) この企画展については、森本孝「物づくり企画展『船大工用具と木造船』の展示設営始末記」(『文化と交流』1、二〇一四年)を参照。

(2) このシンポジウムは、公益財団法人福武財団の助成「宮本常一撮影写真による瀬戸内文化の資源化」（研究代表者・印南敏秀）の研究成果の報告会でもあり、同財団の後援による事業だった。

(3) 宮本常一「町衆の町―周防大島久賀」（『宮本常一とあるいた昭和の日本』五、農山漁村文化協会、二〇一一年）。以下、宮本の久賀についての回想は本書による。

#### 【交流短信】

こんにちは！東和図書館です。

新緑の美しい爽やかな季節は読書にぴったりですが、梅雨の季節しとしと雨を眺めながらの読書もおつなみの。そこで今回は、最近入った素敵なお本を二冊ほど紹介いたします。

まずは佐々木健一著『辞書になった男』。三省堂の『明解国語辞典』を作ったケンボー先生と、その助手を務め、後にライバルとなった山田先生の二人の人生を追うノンフィクション。NHKのドキュメンタリーを再構成したものです。地味な辞書作りの陰の謎のドラマと二人の“思い”。著者いわく「字引は小説よりも奇なり」。

そしてもう一冊は、上中別府チエ著『八三歳の女子高生球児』。まるでマンガのような題名ですが、こちらもまたノンフィクション。七六歳で夜間中学に入学し、その後定時制高校に進み野球部に入部。背番号は⑫、八三歳のチエさんのユニフォーム姿、かっこいい！

この他にも新しい本がたくさん入りました。梅雨の季節も東和図書館へおいでませ！（M）

【論考】

宮本常一の足跡をたどるー呉市倉橋町ー

佐竹 昭

道岡 尚生

はじめに

本稿では、宮本常一氏がみた倉橋島について、氏の日記や調査ノート（採訪録）、また調査した古文書や撮影した写真（以下宮本写真と略す）を手がかりに、その足跡をたどってみることにしたい。

倉橋島は、広島市の南約三〇kmに位置し属島を含めると七二km、瀬戸内では比較的大きな島である。江戸時代は広島藩領安芸郡に属し瀬戸島村・渡子島村・倉橋島村の三ヶ村からなる。瀬戸島・渡子島は音戸町を経て近年呉市へ、倉橋島も倉橋町を経てやはり呉市に合併となった。

宮本氏の故郷周防大島へは陸路広島を経由するとかかなり遠くなるが、海路をとれば目と鼻の先といってもよい位置にある。実際、宮本は船で倉橋の鹿島や横島に直接渡ったことがあり、海上から段畑が見事に開かれた鹿島の姿を撮っている。

宮本氏が倉橋を訪ねたのは、一九五〇年三月が初めてのことと思われる。水産庁の漁業制度調査の一環であった。以後、日記や農漁村採訪録等によると五七年八月二十五日、二十六日に二回目、五九年八月三十日に三回目（鹿島・横島）、六六年十二月二十三日に中国放送番組関連で上空からの撮影があり、七四年十二月十八日、十九日に四回目、七八年十月十九日、二十一日が五回目であった。

最初の倉橋島訪問についてはすでに採訪録が刊行されており<sup>(1)</sup>、聞き取りの内容や古文書の筆写など、調査状況を知ることができる。二回目以降については撮影した写真が残されていて、氏の関心が何に寄せられていたのかを直接伝えてくれる。写真については、さらに被写体のその後というような別の観点から新たな意味を付加することもできるかもしれない。

宮本写真をめぐる最近の研究動向や社会活動については高木泰伸氏の整理に詳しいが<sup>(2)</sup>、周防大島文化交流センターでは、定期的に宮本写真の企画展示を行うとともに、写真撮影地に向いて展示会を開催、地元町内でも「古写真の風景をあるく」と題して過去と現在の風景を対比してみる活動を行っている。宮本写真のなかの倉

橋島はどうであろうか。

また、宮本氏は、村や町を歩き、見たり聞いたりして地域の過去・現在の暮らしぶりを把握し、かつまた将来を考え提言する人であった。しかし、歴史研究者のように古文書の調査にも熱心であった。その様子は倉橋島でもうかがえるが、どのように研究に生かされていたのであるうか。

以上のようなことについて、印南敏秀氏のお誘いが発端で(3)、町史編纂に関わったことのある倉橋島で考えてみることにした。ただし、佐竹が初回の調査について担当し、二回目以降については、倉橋町在住で当時町史編纂に従事された道岡尚生氏に依頼し、まずは宮本写真の撮影場所を調べることを主眼とした。

## 第一章 倉橋島の最初の調査

一九四九年一〇月、戦後の漁業制度改革に関連して水産庁は全国の漁業制度資料の調査を常民文化研究所に委託し、宮本氏は瀬戸内海を担当することになった。倉橋島の調査は翌五〇年三月五日から九日にかけて行われた。以下、氏の日記をもとに採訪録などと対照しながら調査

を追ってみる(4)。

調査の目的は漁業関係の古文書の調査と蒐集であったが、ひろく島の暮らしについても聞いている。宮本氏らしいところと思われるので先に聞き取り調査についてみておく。

五日夜の角戸氏に続いて、六日朝は浄土寺で島の歴史をかなり詳しく聞き(内容は採訪録五〇〜五八頁)、七日朝は桂浜神社の原氏、八日午後は室尾の加登保五郎氏から朝鮮出漁や地域の漁法について聞いている(六三〜七六、一〇四〜一一三)。本浦から室尾へ行く途中の尾立で畑の土岸の築き方や塵芥肥料の様子も観察している。九日は鹿老渡の信順寺で過去帳をもとにおばあさんから話を聞き(九二〜一〇三)、夜は再び加登氏を訪ねている。

信順寺での聞き取りは、早くもこの年十一月に「海村の変貌過程」にまとめられた。十一月十一日の日記には「倉橋島鹿老渡の変遷を信順寺の過去帳で追うて行つて見ようとす。之は私にはおもしろい」、翌日にも「船着場として発達してきた土地が後に農漁村にかわつてゆくのである。一見大変うらぶれた所に見えつつあきらかに人家はふえている。そして地縁的なものから血縁的な結

合に変じてゆく過程を追って見た。血縁共同体はつよい力をもつと、珍しく内容まで記している。享保期に開かれて以来の鹿老渡の一軒一軒の推移を追ったものである(5)。

この作品は五一年五月に『新地理』に掲載され、『日本の離島』(未来社、一九六〇年)に収録、さらに『瀬戸内海の研究Ⅰ』(同、一九六五年)でも第三篇「近世への展開」第二章「島嶼船着場集落の形成」の中心にすえられている。

なお三月九日の日記に「古文書があるらしい」と記された野村家住宅はその後の再訪時(一九七四年十二月)にも健在で宮本写真に収められている。しかし残念ながらその後解体された。帆船時代の船着き場が農漁村に変貌する過程、ひよっとしたらそれよりはるかに大きな変化が、今しずかに進んでいる。

次に、本来の目的であった古文書の調査についてみておきたい(6)。

六日午後は役場を訪ねる。倉庫に古いものは見あたらなかったという。それでも二、三の資料と『倉橋島志』を借用した。同書は明治四二年の刊行物であるが豊かな

地誌情報を含み、別途抄出筆写されている(7)。採訪録の村役場の項に村明細帳や寺社縁起類(8)の目録が記されているので筆者も不審に思ったが、よく見ると『倉橋島志』例言記載の参考書類をそのまま写したものである。

この時は役場の近世文書はほとんど見ていないと思われる。続いて西蓮寺で「倉橋島風土記」(9)の借用を申し込み東京へ送ってもらうことになった。

翌七日午後は再度役場を訪ねて大般若経を見せてもらい奥書をいくつか筆写した(五九〇六〇)。また朝のうちに依頼していた尾曾越文書を借用している。周防大島に帰ってからその筆写を続け、東京へ送付後も一部手元に残したのか筆写を続けている。採訪録には、同家の土地買得証文類の内容を項目別にして多数筆写しており

(一一四〇一二六)、島嶼部における地主の土地集積に強い関心をいっていたようである。また安芸・備後両国の「浦島家数石数」の記録も筆写し(七七〇九一)、『瀬戸内海の研究Ⅰ』第三篇第四章二「安芸・伊予の舸子浦」の中心的な資料に用いた。

ところで、筆者らが倉橋町史の調査で尾曾越家をお訪ねした際、一九五〇年三月七日付け水産庁資料整備委員

会・日本常民文化研究所調査員宮本常一の借用証、一九五三年五月十三日付け返却通知書とともに、ほぼ当時の姿のままと思われる返却された古文書の包みに出会う、ということがあった。包みの中身は享保九年と寛政五年の差出帳(10)や旅日記、さらに数多くの土地売買証文類であり、宮本氏が借用・筆写したものにあたると思われる。これは今もその姿で残されている。町史編纂当時は「採訪録」の内容は知る由もなく、今後機会があれば両者の内容を精査してみたいと思う。

宮本氏はこのほか本浦白華寺で秘仏の鎌倉時代の観音を拝観し(11)、船棟梁の友沢家も訪ねた。

一九五七年八月の二回目の倉橋島訪問では、このときからの懸案だったのか白華寺観音と大般若経の写真を撮ると日記にある。しかしそれは宮本氏自身の撮影ではなさそうである。宮本写真では、白華寺の石仏や本堂、また本浦の街並みや宮の浦の船渠、造船所などである。

続く三回目、周防大島から船で鹿島や横島を訪れている。海上から撮影された鹿島の写真は、宮本氏も「おそらく瀬戸内海随一」(12)と評された段畑で著名である。

また、鹿島は寛永の地詰帳に切畑が見えるので焼き畑が

行われたとも記されている(13)。地詰帳は役場文書として伝来しているので最初の調査以後に役場の古文書を見る機会があったらしい。さらに六六年十二月には空から宇和木や重生・大向などを撮影した(14)。やがてこれらの写真は『私の日本地図4瀬戸内海I広島湾付近』(同友館、一九六八年)を飾ることになる(15)。

以上みてきたところをまとめてみる。

最初の倉橋島調査の目的は水産庁委託による古文書の調査・蒐集であったが、自らの関心から聞き取りに時間を割いており、古文書についても単なる請け負い仕事とは思えない。地域を知るためにまずは近世の村明細帳など地誌類を重視していたようである。尾曾越文書への関心はさらに島嶼地域の土地移動や地主形成を考えようとしていたことを思わせる。

調査の方法について、このころと思われる文章に次のような記述がある(16)。

調査の方法はそれぞれ土地における古文書及び資料をできるだけさがすことにし、それらを先ず十分しらべた上で、村内を一巡し、村のあり方、住居の様子、耕地の状況などを見、略図のとれるものは略図をつくる。さらに古老について

文献をたよりに聴書をとる。この場合両者に喰違いがあれば、何れにあやまりがあるかを十分にたしかめることにした。

しかしながらそれらは必ずしも精確は期しがたかつた。

ここで筆者が注目するのは、村を歩く前にまずは古文書を探してそれで村のイメージをつかもうとしていることである。

「あるいて来た道」にもこの時期の調査について記述がある(17)。

私も渋沢先生から協力するようにとのお話があつて瀬戸内海・対馬・能登などで、古文書の調査にあつた。これは私にはよい勉強になつた。私はもともと民俗学徒なのだから、どうしても古老からの聞き取りが主になる。古文書もその場で一通りよみ、そこにかかれていゝ事実をたしかめないと気がすまなかつた。そのことによつて、古文書の裏にひめられていゝいろいろのいきさつを知ることができた。一八世紀後半位のことであれば農民や漁民も古文書にかかれていゝような事実を案外知つていた。

(中略)

この古文書調査に参加したことで、その後の民俗調査にはできるだけ古文書や役場にある明治時代の資料に目をつ

けるようにしたし、また漁村調査にあつて漁業権の証書をまずは見せてもらうことにした。

一九五〇年の倉橋島の調査は、まさにその通りの方法で進められていたようである。古文書からえられる情報は、氏の方法のなかでやはり重要な位置を占めており、それがこのころ形成されたようである。

一方、当時は右の水産庁の漁業資料調査とも関係の深い近世庶民資料調査が全国で進められ、広島でも後藤陽一氏が近世史料の調査と研究を進めていた。宮本氏は調査に入る前の四九年十二月に河合・後藤両氏に会い「瀬戸内海は大して深くやつておいでではないようである」と日記に記している。倉橋島も含む瀬戸内島嶼の歴史研究が大きく前進しようとしていた時期である。どのような会話が交わされたのであろうか。

なお、周防大島文化交流センターには宮本家から多くの遺品資料が寄せられ整理が進められている。倉橋島調査の際の資料もいくらか伝えられているようである。倉橋島ではその後町史編纂事業が進められ筆者も参加したが、これを機会にさらに研究が進められればと思う。

(佐竹昭・広島大学大学院総合科学研究科教授)

## 第二章 倉橋島の宮本写真

宮本氏は昭和二五年に倉橋島に入り、以後、何回かの島を訪れている。島の様子を写真に収めたのは、昭和三二年からである。この章では、宮本氏の写真に遺された倉橋島（現呉市音戸町・倉橋町）の各地を、平成二六年現在の風景と比べ、当時の話題などを交えながら紹介したい。

取り上げた写真は撮影された年代順（昭和三二・三四・四一・四九・五三年）で、当時の時代を反映したものの、この島ならではの話題性あるものを選んだ。そのため、年代は時代を身近に感じることのできる元号を用いた。

### 一 木造船の碇泊（音戸町早瀬）昭和三二年



【写真1：昭和32年】



【写真2：平成26年】



【写真3：昭和32年】



【写真4：平成26年】

写っている木造船は、瀬戸内海で活躍していた機帆船である（写真1）。倉橋島では、昭和五〇年代まで機帆船の姿を見ることができた。早瀬地区は、音戸町内では海運業の盛んなどころだ。機帆船という名は、動力に機械と帆が用いられたことによる。写真1では、船首近くに帆を張るマストがあるのがわかる。こうした木造船は、やがて鉄鋼船に切り替えられていった（写真2）。

### 二 埋め立てられていく海岸線（音戸町早瀬）三二年

島に砂浜のあった頃は、「タデ船」や子供たちの海水浴が見られた（写真3）。昭和三六年、倉橋島と呉市の間に音戸大橋が架かり交通量は増え、それに伴い道路整備も



【写真 5：昭和 32 年】

は当時、小さいながらも棧橋があった。棧橋には、これから船に積み込み込むのか、荷札の付いた荷物が積まれている（写真 5）。棧橋付近には、また船舶売買相談所の看板を掲げた建物も見受けられる。さすがに船所である。この建物は、今も残されていて、玄関の形

徐々に行われていった。道路のほとんどが海岸にあるため、海は埋め立てられ、砂浜はなくなっていた。変化に富んだ島の海岸線は、道路の拡張や海岸整備などにより埋め立てられた（写真 4）。

三 島の棧橋とその付近（音戸町早瀬）三二年

島に橋が架かっている頃の交通手段は何と言っても船である。倉橋島には広島・呉から定期便が運航されていた。早朝、室尾を出た船は途中、本浦・宇和木・早瀬などに寄港し、呉までは四時間かかったという。乗客は棧橋や砂浜から通い船で本船に乗り移った。早瀬地区に



【写真 8：昭和 32 年】

四 大きな木造の小学校（倉橋町本浦）三二年



【写真 6：平成 26 年】



【写真 9：平成 26 年】



【写真 7：平成 26 年】

状が特徴的だ（写真 6）。現在古い棧橋は取り替えられ、新しいものが同じ場所に設置されている（写真 7）。



【写真 11：平成 26 年】



【写真 10：昭和 32 年】

写真 8 は、火山山麓に建立された白華寺（真言宗）の参道付近から、本浦地区内を見下ろしたものである。家並みの中には、戦前に建てられた、当時としては規模の大きい木造校舎を見ることができ、小学校は戦前・戦後の一時期、全校児童数が三〇〇人を超えるときがあった。木造校舎は、昭和四〇年代前半に取り壊され、鉄筋コンクリート校舎になった（写真 9）。この小学校は児童の減少により、平成二五年に統合され廃校となった。

## 五 向きが変えられた石仏（倉橋町松原）三二年

写真 10 は、白華寺の参道付近の石仏を撮ったものである。『倉橋町史資料編Ⅱ』によると室町時代の作と推定されている。本浦には、鎌倉・室町時代の文化財が点在する。倉橋島を領有した倉橋多賀谷氏の城跡（南北朝期）、白華寺の本尊である十一面観音菩薩立像（鎌倉期）、桂浜神社本殿（室町期）などで、これらからは、

倉橋島の経済的・文化的な豊かさがうかがわれる。この石仏は当時の写真では、旧参道に向かって（北西）安置されていた（写真 10）。ところが、付近に新たな参道が整備されて以後、この石仏は、新参道側に向（北東）が変えられている（写真 11）。

## 六 往時を偲ぶ長屋門（倉橋町松原）三二年



【写真 12：昭和 32 年】



【写真 13：平成 26 年度】

代々造船商を務めてきた友澤家の長屋門である（写真 12）。友澤家では、安政年間、長州藩の依頼を受け、人力車輪という新動力を使った「利涉船倉橋丸」の開発を進めている（試作に終わる）。これは、倉橋島の造船技術力の高さがうかがえる出来事である。長屋門は現在も良

好な形を止め、往時の繁栄を偲ぶことができる(写真13)。  
七 江戸時代に起源をもつ船渠(倉橋町桂浜) 三二年



【写真 14 : 昭和 32 年】



【写真 15 : 平成 26 年】

この場所を地元の人々は、「ドック」と呼んでいる。江戸時代の元文・寛保年間(石垣を修築したのは享和元年)に起源をもつこの船渠は、明治に入り西洋型船の建造・修理のため改修された。現在の遺構は、ほとんどがその頃のものと思われる。海に面した出入り口を堰き止め、空堀の中で船を修理・建造し、完成後は満潮時に潮を入れ、船を沖に出していく方法は、近代造船の建造法に似ているため、「洋式ドック」ともいう。何時からであろうか、ここでの作事は行われていない。昭和三二年に撮ら

れた写真(写真14)を、現在のもの(写真15)と比べると、向かって右側の石垣に変化が見受けられる。ドックは近年まで、漁船の係留と台風の避難港として利用されてきた。

八 オイコを背負う(音戸町鯛浜) 三二年



【写真 16 : 昭和 32 年】



【写真 17 : 平成 26 年】

写真16には、旧音戸町役場近くの海岸を、オイコを背負って歩く女性の姿が写されている。オイコは畑作には欠かせないが、このような利用方法もあったようだ。時期は夏であろうか、日傘に半袖姿、オイコは買い物籠にもなっていた。当時の防波堤は現在、高潮対策のため規模が大きくなっている(写真17)。

九 湾内の漁船（音戸町北音戸）三二年



【写真 18：昭和 32 年】

写真 18 に見られるは、旧音戸役場付近の漁港に繫留中の漁船である。マスト頭上から三角状に掛けている網は、底引き用のものであるうか。倉橋町には、昭和二〇年代後半まで続いていた、とり貝・エビ専用の打瀬船がいた。当時は、とり貝が湧いていたという。一斗缶にとり貝が一杯詰められ、何十缶も出荷されたようだ。写真に写された漁港は現在整備され、立派な作業場などが併設されている（写真 19）。



【写真 19：平成 26 年】

一〇 島に待望の大橋が架かる（音戸大橋・奥市音戸町）三二年、四九年



【写真 20：昭和 32 年】

写真 20 は、橋が架かる前の音戸の瀬戸である。昭和三六年、この間に待望の橋が架かった（写真 21）。高度経済成長、所得倍増を打ち出した池田総理は、この倉橋島が選挙区であり、音戸大橋の建設に尽力したという。当初は有料橋であったが、倉橋島と隣の江田島に大橋が架けられ交通量は激増し、一〇年ぐらいで無料になった。反面、朝夕・夏の海水浴シーズンは、大渋滞を招いた。そこで造られたのが、第二音戸大橋である（写真 22）。時間は一〇程度短縮され、渋滞はな



【写真 21：昭和 49 年】



【写真 23: 昭和 34 年】



【写真 24: 平成 26 年】



【写真 22: 平成 26 年】

一一 島の段々畑（倉橋町鹿島宮ノ口）三四年

なくなった。一つの島に本土などから橋が二つ架かった例は、あまりない。倉橋島へは、本土と二つの大橋が架けられ、利便さは増した。これにより、島の人口減少に歯止めがかかれば、いいのだが。



【写真 25: 昭和 34 年】



【写真 26: 平成 26 年】

一二 島の海岸線（倉橋町鹿島祖之元）三四年

まさしく「耕して天に至る」に相応しい光景である（写真 23）。写真からは、山がほとんど無駄なく耕地化されているのがわかる。先人のたくましさに驚かされる。山頂の他、所々に見られる樹木は、住宅用の燃料や「タデ船」用の材料などとして、わざと残された。現在、島の段々畑のほとんどは耕作されていない状態で、畑はもとの山に戻りつつある。近年、段々畑の石積みみが、新聞やテレビで取り上げられたため、見学者が時に訪れることがある。写真 24 は、平成二六年、宮本氏関連の調査のため宮ノ口地区の段々畑を訪れた印南氏一行である。

遠くに見える集落は、宮ノ口地区である（写真25）。

写真は、当時鹿島小中学校のあった砦之元地区から撮られたもので、海岸線に沿った道らしきものは見あたらない。この当時、隣の宮ノ口地区へは、幅一尺位（約30センチ）の細い道を山越えし、通ったという。昭和二五年頃には、幅二尺位の道路が学校前までできた。のちに、道路は大型車が通れる広さに整備されていった（写真26）。

### 一三 海ぎわに建つ学校（倉橋町鹿島砦之元）三四年



【写真27：昭和34年】



【写真28：平成26年】

鹿島への交通手段は船であった。島に橋が架かったのは昭和五〇年である。写真27は、宮本氏らを迎える鹿島小中学校の先生たち。向かって左の木造校舎が中学校、

右は小学校で昭和二九年の一クラスの児童数は四〇人であったという。又、この頃の鹿島全体の人口が二〇〇〇人を少し切ったというから、今とは桁外れに多かった。

学校前には、車の通れるような道はなく、校舎からは直ぐに海がとどく。ときには、先生と生徒が魚釣りに行ったこともあった。その後、中学校は廃校となり、小学校は昭和六二年に中学校跡地に移転した。宮本氏らを迎えた時の校舎は取り壊され、跡に残ったのは礎石と、グラウンドである。グラウンド跡は、現在ヒジキ干場などとして利用されている（写真28）。

### 一四 江戸時代に拓かれた新開地（倉橋町宇和木）

四一年、四九年



【写真29：平成26年】

この時期には、ヘリコプターから撮られた写真が遺されている。写真29は、宇和木地区の新開地の様子である。台形状の新開地には工作物がまったく、といったいいほどない。見えるのはほとんどが田んぼである。

新開地が築かれたのは江戸時代後半である。耕作地に恵まれない人たちは海を埋め立て新開地を作り、山に石垣を築き段々畑とした。なお、四九年の写真には、新開地の一角に、石材工場が見受けられる(写真30)。このうち、新開地には民家やスーパ―なども建てられていく(写真31)。



【写真30：昭和49年】



【写真31：平成26年】

一五 団地に変貌する岬(倉橋町重極) 四一年、四九年  
写真32では、重極地区の団地造成前の岬が見える。昭和四〇年代末頃から、この岬の一部が造成され、民家が建つようになる。四九年に撮られた写真では、造成地に



【写真33：昭和49年】



【写真32：昭和41年】



【写真34：平成26年】

に民家が建ちだしているのがわかる(写真33)。この後、さらに増えている(写真34)。音戸町でも同じような時期に大規模な団地が造成された。現在音戸・倉橋の団地では高齢化が進んでいるようだ。

一六 隣の島からの移住者たち（倉橋町重生） 四一年



【写真 35：昭和 41 年】



【写真 36：平成 26 年】

写真 35 は、上空から撮られた重生地区である。地区には石崎姓が多く、その先祖は江戸時代の万治元年に周防大島から移り来たという。当時の家並みは、今とはあまり変わらないが、空き家が目立ってきた（写真 36）。同地区にあった小学校は廃校となり、跡地には近年、知的障害者の更正施設が誘致された。地元住民と入所者との交流などが行われていて、高齢者の多い地域に賑わいと潤いが与えられているようである。

一七 映画のロケ地になった集落（倉橋町大向） 四一年  
大向地区は、昭和四七年に上映された「故郷」の舞台



【写真 37：昭和 41 年】



【写真 38：平成 26 年】

となった。この当時、付近の山から切り出された石を運ぶ石船で地区は賑わった。映画「故郷」は、この石船が主役であった。作品は、高度経済成長の中、石船を捨て、故郷を捨てて、都会への移住を決断するまでが描かれている。写真 37 には、石船を係留する白くて長く延びる波止場が見える。この地区は昭和三八から三九年にかけて、陸上自衛隊による道路建設で交通事情が良くなった。しかし、若者は新天地をもとめ、徐々に故郷を離れていった。残されているのは、ほとんどが高齢者である。もちろん、石船も地区から姿を消した。波止場は今日、小型船の係留地になっているようだ（写真 38）。

一八 狭い瀬戸で船を追い抜く水中翼船（音戸の瀬戸）

四九年



【写真 39: 昭和 49 年】



【写真 40: 平成 26 年】

音戸の瀬戸は、狭いところで幅が一〇〇mを切る。潮の流れは速く、難所といわれる。海難事故もたびたび繰り返された。写真は、音戸の瀬戸を走行中の水中翼船、広島・呉く松山間で運行した（写真39）。この当時、狭い瀬戸で水中翼船が船を追い越すのは、日常的であった。何時の頃か、水中翼船による海難事故が発生し、このような姿は見られなくなった。以後、音戸の瀬戸での走行は、スピードが緩まった。時代は下り、平成一二年に水中翼船は運行を取りやめ、代わって最新鋭の高速船「スーパージェット」にその座を譲った（写真40）。

一九 両脇にすぎ間なく民家が並ぶ（倉橋町松原）

四九年



【写真 41: 昭和 49 年】



【写真 42: 平成 26 年】

倉橋島は造船業が盛んであった。とくに江戸時代、その中心となったのは本浦地区である。造船業が行われていた当時は道路を挟んで海側に造船場が（写真41からは道路の右側）、その反対に民家が立ち並んでいた。明治以降、造船場には民家が建つようになった。写真41は昭和四九年に撮影されたものであるが、通りの両脇にはすぎ間なく民家が並び、人の往来も目に付いた。近年、両脇の民家は所々で欠けていき、空き地が目立つようになってきた（写真42）。

## 二〇 造船所のある風景（倉橋町釣士田）四九年



【写真 43：昭和 49 年】



【写真 44：平成 26 年】

木造船の建造が行われていた倉橋島では、1000人の音の大きい集落には、たいてい造船所があり、一日中槌の音が絶えなかった。昭和四〇年代から鉄鋼船が主流となり、大型の木造船は建造されなくなったが、修理などは行っていた。写真43には釣士田地区にあった造船所が写されている。この地区は一杯船主所としても知られている。木造船が建造・修理されなくなると、造船所の数も減っていった。この造船所跡には、現在アパートが建っている（写真44）。

## 二一 宇和木峠からの眺め（倉橋町本浦火山中腹）四九年



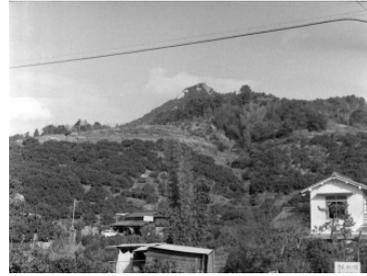
【写真 45：昭和 49 年】



【写真 46：平成 26 年】

宇和木峠から見た本浦の集落と瀬戸内の様子である（写真45）。この景色は今も変わらない。かつて、バスで倉橋町の南側へ向かうには、この宇和木峠を越えなければならなかった。狭くてくねくね曲がった道路を走るバスからは、たいてい一人や二人は車酔いする者がいた。大型車との離合は、渋滞になるときもあった。宇和木峠越えは、難所であったけれど、峠からの眺めは、気分を慰めた。平成七年には、この峠下に町民待望のトンネルが開通し、難所は解消された（写真46）。

## 二二 耕作地に文化施設ができる（倉橋町桂浜）四九年



【写真 47：昭和 49 年】



【写真 48：平成 26 年】

桂浜地区は国の重要文化財である桂浜神社本殿、万葉集史跡などの文化財が点在する。付近には、柑橘類の耕作地もあった（写真 47）。町は桂浜地区に、平成元年の大型体育館に始まり、一〇年の桂浜温泉、一五年にはこの温泉を利用した温水プールなどを建設した（写真 48）。桂浜地区の耕作地などは、町の文化ゾーンと観光施設へと変わった。

## 二三 広がる道路（倉橋町尾立）四九年

尾立地区から室尾地区に向かう道路の様子である（写真 49）。大型車一台で一杯となる道路幅は、海に面して

いるため台風時期には、波が打ち上がり車は通行ができない状態であった。現在、この場所は海岸側が埋め立てられ一直線状の広い道路となり、その上には防波壁も建設された（写真 50）。これにより車の運転は、安心して楽になった。



【写真 49：昭和 49 年】



【写真 50：平成 26 年】

## 二四 残された商家と通り（倉橋町鹿老渡）四九年

写真 51 は鹿老渡の宮林家を訪れた一行である。宮林家住宅は江戸時代、材木を扱ってきた商家で一九世紀の建築物と推定されている。鹿老渡は、江戸時代の享保一五年に開かれた沖乗り航路の港で、町割りは基盤の目の状に整備されている。当時の道路幅は、現在の車社会にも

通用し、その先見性がうかがわれる（写真52）。



【写真 51：昭和 49 年】



【写真 52：平成 26 年】

二五 朝鮮通信使ゆかりの町家（倉橋町鹿老渡）四九年



【写真 53：昭和 49 年】



【写真 54：平成 26 年】

写真 53 に撮られているのは、享保一五年に整備された鹿老渡と、同時期の建築と推定される野村家住宅である。野村家は、倉橋島村の庄屋を勤めた。宝暦一四年、このときの朝鮮通信使が大時化のため鹿老渡に避難した。使節一行は、急きよ町家に宿泊した。野村家住宅は、宝暦一四年にはこの地に建てられており、通信使が立ち寄った可能性がある。野村家住宅は、現在取り壊され、跡地には朝鮮通信使が目にしたであろう蘇鉄が、今でも碧く眩しい（写真 54）。

二六 し尿処理場の建設（倉橋町重生）四九年



【写真 55：昭和 49 年】



【写真 56：平成 26 年】

島の衛生状態の改善として、し尿処理場の建設が始まった（写真 55）。この頃には、上水道の敷設も行われ、

広島市の太田川からは定量の水道水が供給された。とくに島の水は、井戸水に頼ることが多く、夏などの渇水期には水不足に陥り、衛生状態も悪くなることがあった。これらの施設は、住民の日常生活を安定させ、衛生面を向上させた（写真56）。

## 二七 テレビドラマの撮影風景（倉橋町重生）五三年



【写真 57：昭和 53 年】



【写真 58：平成 26 年】

写真57は昭和五三年一〇月、NHK連続テレビ小説「わたしは海」の撮影風景である。ロケ地は、重生地区の海岸で、一行は偶然にも、ロケ現場を写真に収めている。砂浜には、木造船と遠くに元中学校分校校舎の残さ

め立てのため切り取られた土砂の跡である。山は、年を追うごとに姿を変え、大きさも徐々に小さくなっている（写真58）。

## 二八 島にスーパーが進出（音戸町御所ノ浦）五三年



【写真 59：昭和 53 年】



【写真 60：平成 26 年】

向かって左に見える白いものは、牡蠣の種付けに使うホタテ貝の殻である（写真59）。付近には、県道沿いに牡蠣の作業場が数軒ある。平成が間近の昭和63年、この場所にスーパーが新店した（写真60）。食料品などが、大量にかつ総合的に買えるため、島中から車でやってきた。数年後には、別の地区にスーパーが進出したため、客層は分かれた。今では、倉橋島に食料品用スーパーを

始め、日常雑貨店など七店程が出店している。その一方で、集落の小型店舗の営業に影響が出てきている。

## 二九 牡蠣の養殖（音戸町波多見）五三年



【写真 61：昭和 53 年】



【写真 62：平成 26 年】

写真 61 は、牡蠣養殖などに使われた竹杭を撮ったものである。この正式名称は「杭打式簡易垂下養殖法」とい、昭和の初めに広島県で普及したようである。竹杭などが朽ちず、残されているのは、おもに海水に浸されている時が多いからであろうが、今日でも当時撮られたこれらの一群を目にすることができる（写真 62）。今では竹筏による養殖法により、大量の牡蠣が生産されている。

## 三〇 庄屋を勤めた旧家（倉橋町石原）五三年



【写真 63：昭和 53 年】



【写真 64：平成 26 年】

倉橋島の庄屋を何代も勤めてきた、尾曾越家の門と堀を写したものである（写真 63）。尾曾越家には、昭和二五年、宮本氏が調査のため訪れている。このときに同家に伝わる古文書を数点借用したことが、「農業村探訪録Ⅱ」に記録されている。昭和六一年から始まった倉橋町史編さん事業で、尾曾越家の調査に入った。このときには、三つある蔵の中から古文書などを収集した。後に資料は寄贈され、町の歴史民俗資料館で収蔵している。現在、尾曾越家住宅は取り壊され、土地の一部は市所有で市民生活バスの車庫となっている（写真 64）

三一 土手の島（倉橋町尾立）五三年



【写真 65：昭和 53 年】



【写真 66：平成 26 年】

島の畑というと、石垣が想像されるが、土手で築かれたものもある（写真 65）。倉橋町ではみかん栽培が盛んであったが、甘藷芋も段々畑を潤わせた。畑で作られた甘藷芋は収穫されたのち、町内の澱粉工場に送られた。倉橋町井目木地区には、大規模な澱粉工場があった。甘藷澱粉の需要が少なくなると、甘藷芋の生産は落ちてきた。土手の畑には馬鈴薯、ネギなどが替わりに植えられていくようになった。現在、土手の畑近くの県道は大きく拡張整備され、畑は耕作されていない状態となっている（写真 66）。

三二 台風とたたかう集落（倉橋町大迫）五三年



【写真 67：昭和 53 年】



【写真 68：平成 26 年】

大迫地区は南に面し、入り江が深く、土地も低いため、もろに台風の影響を受けた。地区には、台風の被害を避けるために防波堤が建設された。写真 67 は昭和五三年に撮った海岸の様子であるが、まだ防波堤は建設されていない。防波堤の建設は、昭和五〇年代後半と、さらに平成一〇年代終わりに大規模な波返しが付いたコンクリート堤が二度に渡り構築された（写真 68）。地区は台風とたたかいかいでもあった。

三三 浜辺で遊ぶ子どもたち（倉橋町尾立）五三年



【写真 69：昭和 53 年】



【写真 70：平成 26 年】

浜辺の少ない今日では、懐かしい光景である（写真 69）。浜辺にはいくつものタイプがある。細長いもの、幅がひろいものなど、写真に見える浜辺は案外と幅が広い。そのためか、この浜辺では秋の例大祭に、御輿の渡御が行われ、神事がある。浜辺は、また子どもたちの遊び場になった。しかし、少子化の進む地区では、こうした光景も見られなくなってきた（写真 70）。

（道岡尚生・呉市海事歴史科学館学芸員）

【脚注】

- (1) 『広島県下漁村・漁業資料調査ノート（1）』（宮本常一 農漁村採訪録Ⅱ、周防大島文化交流センター、二〇〇五年）、『同（2）』（同Ⅳ、二〇〇六年）。
- (2) 高木泰伸「宮本常一写真の社会的活用―写真資料についての覚書―」（『比較日本文化研究』第六号、二〇一三年）、同「宮本常一、読みの諸相―蔵書資料についての覚書―」（『同』第五号、二〇一二年）、同「宮本常一写真データベースの現状と課題」（『民具研究』一四六号、二〇一二年）。その後、問題意識や方法を読み取る優れた紹介、香月洋一郎『景観写真論ノート』（筑摩書房、二〇一三年）が刊行された。
- (3) 本稿は公益財団法人福武財団の助成「宮本常一撮影写真による瀬戸内文化の資源化」（研究代表者、印南敏秀）による研究成果の一部である。
- (4) 日記は『宮本常一写真・日記集成』（毎日新聞社、二〇〇五年）により、採訪録は前掲注（1）による。漁業制度資料調査の概要については、独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所・神奈川県大学日本常民文化研究所『中央水産研究所所蔵古文書（漁業制度資料）』の概

要』Ⅱ「漁業制度資料調査保存事業」と資料の整理・保存の経過（二〇〇六年）参照。

(5) 宝暦十一年の朝鮮通信使鹿老渡上陸についてその宿泊先を復元する上でも大いに参考になった。それほど詳細な内容である。拙稿「宝暦十四年朝鮮通信使の鹿老渡寄港をめぐる」(『広島大学総合科学部紀要Ⅰ地域文化研究』二二巻、一九九五年) および、『倉橋町史通史編』

(倉橋町、二〇〇一年) 第五章第三節 2・3 参照。

(6) この時の調査に関連する資料目録に、日本常民文化研究所・水産庁資料整備委員会『漁業制度資料目録』第二集内海篇Ⅰ(一九五〇年三月)、『同』第五集内海篇Ⅱ(一九五一年八月)がある。

(7) 漁業制度資料調査で作成された筆写稿本について、筆者はなお調査の機会を得ていないが、水産総合研究センター『中央水産研究所蔵筆写稿本(漁業制度資料)の概要』(二〇一一年)、および神奈川大学日本常民文化研究所のウェブページで概略知ることが出来る。

(8) 元禄と明和の差出帳は町役場に伝来し『倉橋町史資料編Ⅱ』に収録。「国郡志御編纂(集二付) 下調査出帳」や諸縁起類は所在不明で個人蔵一本のコピー版のみ町史

編纂室架蔵である。そのため呉市沢原家本の国郡志を『同資料編Ⅱ』に収録したが、拙稿「地誌編さんと民衆の歴史意識・広島周辺地域を中心に」(『広島市公文書館紀要』一七号、一九九四年)で紹介した縁起類の収録については果たせなかった。

(9) 西蓮寺所蔵「芸州倉橋浦風土記」は書き下し文に改めて『倉橋町史資料編Ⅱ』(倉橋町、一九九一年)収録。

(10) 享保と寛政の差出帳は『倉橋町史資料編Ⅱ』に収録。尾曾越家文書のうち主に村方関係は倉橋町に寄贈された。寺では鎌倉時代の作と伝え宮本氏もそう判断している。その後広島県の調査でも確認され、県の重要文化財に指定された。

(12) 『農業技術の経営の史的側面』(宮本常一著作集 19、未来社、一九七五年) 二七二頁。

(13) 前掲注(12) 二二九頁。

(14) 「空から見る広島湾の島々」(『宮本常一離島論集』第五巻、みずのわ出版、二〇一〇年、初出一九六七年) 参照。

(15) 同書「二〇倉橋島」の記述のうち、大般若経は豊後国佐賀郡龍泉庵で写経され周防大内氏との関係で伝来したらしいこと、桂浜の乾式ドックの起源は幕末ではなく少

なくとも享和元年（一八〇一）にさかのぼることなど、その後の『倉橋町史通史編』（倉橋町、二〇〇一年）の見解もご参照願いたい。

(16) 『村の旧家と村落組織（1）』（宮本常一著作集32、未来社、一九八六年）。

(17) 『民俗学への道』（宮本常一著作集1、未来社、一九八六年）。

#### 【交流短信】

宮本常一の写真をみると、いまこの風景はどうなっているのだろうかと思わずにはいられない。企画展示の準備やレファレンスで写真を見ていると、どうしてもその場所に行かずにはいられなくなってしまう。今回は印南敏秀氏、佐竹昭氏のご配慮で、福武学術振興財団から助成金をいただき、いくつかの島をまわることができた。倉橋島では道岡尚生氏にたいへんお世話になり、鹿島や尾立の「ドギシ」（ツチアゼ）の段々畑もみることができ、いろいろなことを考えさせられた。また、江田島、蒲刈島、豊島、大崎下島もみているいた。平成二一年に開通した「あび大橋」をわたったのははじめてだった。休日を利用して備讃瀬戸の島や長島などもみてあるいた。先日は萩博物館の企画展の観覧に萩を訪ね、少し足を伸ばして萩の大島へも渡った。考えてみれば、宮本写真に誘われていろいろの島に渡っている。こういった経験はきちんと報告しないといけないのだが、メモが溜まるばかりでまとまった原稿を書いていないことを反省している。（丁）

## 【連載】

### 古写真の風景をあるく―浮島所感―

山根 一史

#### はじめに

浮島は、周防大島町日前の北約五キロメートルに浮かぶ面積二・三一平方キロメートルの離島である。人口は二三四人、一〇一世帯（平成二五年四月一日現在）<sup>〔※1〕</sup>で、島内には樽見、楽ノ江、江ノ浦の三集落がある。

主な産業は漁業と農業。漁業は、イワシ網・タチウオ釣り・底引き網などが盛んで、中でも特産の「浮島イリコ」は味・品質とも高い評価を得ている。農業面では、ミカン栽培が顕著である。

宮本常一は少なくとも五度浮島を訪れていることが文献や日記から確認できる<sup>〔※2〕</sup>。そのうち、文化交流センターには昭和三五年（一九六〇）、三六年（一九六一）、三九年（一九六四）の来島時に撮影した写真がおよそ一〇点あることが分かった。

二〇一三年一月一七日、私は浮島に渡る機会に恵まれた。友森新二氏（文化交流センター地域交流員）等とともに、日前港から樽見港へ渡り、樽見↓楽ノ江↓江ノ

浦の順で各集落を訪れた。島内を散策しながら、宮本がかつて撮った撮影ポイントの「今」をカメラに収めていった。

そこで、宮本の浮島への足跡をたどりつつ、彼が写した昭和三〇年代の浮島の写真を見て、実際に現地を歩いて感じたことを以下に述べてみたい。

#### 樽見

樽見は、浮島の北の玄関口である。

宮本が初めて浮島に渡ったのは、昭和六年（一九三一）四月四日のことである<sup>〔※3〕</sup>。この時は、友人の父親の船に乗せてもらい江ノ浦<sup>〔※4〕</sup>に着き、江ノ浦から峠の小学校を経由して樽見、楽ノ江を訪れている。樽見では、樽見観音に参り、浜辺でくつろいだようである。

次に樽見を訪れたのがはつきり確認できるのは、昭和三九年一月五日である。日記には「樽見を久しぶりに見る。イワシがとれている」<sup>〔※5〕</sup>とあり、港辺や集落内の風景、イリコの製造に勤しむ人々などを写真に収めている。

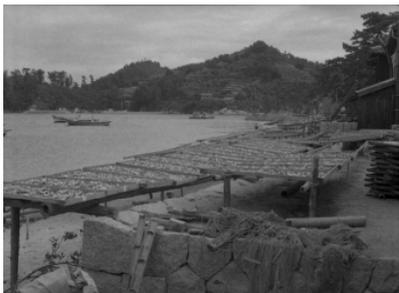
私が浮島を訪れた時、最初に降りたのは樽見であった。



お宮の森に寄り添うように人家が建ちならぶ



現在の五社神社付近



イワシを干す。昭和39年頃の樽見の港付近。



埋め立てが進んだ現在の樽見港付近

昼過ぎの便で着いたこともあり、待合所で食事を取った後、集落の散策に乗り出した。当日は、小雨もパラつく生憎の天気で、風も強く肌寒かった。どこからか現れた黒い犬に導かれながら、最初の目的地である五社神社を目指す。

五社神社は、いつ頃からあったかは定かではない。元文三年（一七三八）、森村・宝王大明神（現神山神社）の神職であった高田将監が萩藩に提出した「宝王大明神由緒書」には「五社大明神一社 同島たるミニ有之」<sup>〔※6〕</sup>と見える。これより、同社が一八世紀半ばにはこの地にあつたものと思われる。梶田清七氏によれば、五社神社は島民の手によって樽見集落の守護神として建立され、昭和八年（一九三三）、楽ノ江に採石のため訪れていた広島県倉橋島の業者たちの手によって本格的に整備されたという<sup>〔※7〕</sup>。

五社神社近辺は、かつてお宮の森に寄り添うように人家があり、人家の前には畑が広がっていたようである。しかし、現在、人家はお宮の森から離れ、かつて畑があつた辺りに場所を移している。宅地造成のため、広い土地が必要となり畑をつぶしたのであるうか。それとも、

畑が休耕地となつてしまひ、その跡地利用のため家屋を建てたのであろうか。

五社神社に続いて、楽ノ江方面に進みながら、樽見港沿いの道を歩く。現在の樽見港は、防波堤の先に埋立地が広がり、漁港は埋立地の先にある。埋立地には倉庫が建てられ、漁業関係者のものと思われる自動車も見られた。昭和三〇年代と現在を比較して最も大きく変わったのは、港湾部の埋め立てと頭島への架橋だろう。

前者について、昭和三九年、宮本が樽見港付近で撮つた写真には、人家の庭先や石垣にイリコを干す風景が見られる。宮本写真と比べると、人家前の道は今より狭く、海辺に近い印象を受ける。『橋町史』には、中原町長時代（昭和三四—四一年）に「浮島漁港の整備拡充」「樽見港棧橋設置の助成」、四四年に「江ノ浦漁港の第四次整備」、四九年には「浮島漁港改修」の記事が見られ<sup>※9</sup>、昭和三〇年代から四〇年代にかけて浮島の港湾整備が進んだことがうかがえる。樽見港の埋め立ての時期まで特定しきれなかったが、写真が三九年のものであることから、それ以後に埋め立てられたのは間違いない。

頭島大橋の架橋は、昭和四六年（一九七二）のことで

ある<sup>※9</sup>。昭和四〇年代、浮島では、離島振興、みかん増産の名目のもと、パイロット事業計画が持ち上がった。当時、みかん産業は好調で、事業の背景には県の同産業拡大の意図があつたと思われる。みかん園造成を柱に、環状道路の新設や貯水池・輸送水管の敷設、頭島への架橋もこの事業の一環として行われた。ところが、着工後、地価の高騰や工事費の上昇、みかん園造成の工事手法の見直しなど様々な問題が発生した。それに加え、四七年以降、みかんは生産過剰のため価格は下落の一途をたどり、四九年、国から「みかん新植抑制策」が出されるに至り、ついに計画は打ち切りとなつた。

現在も、頭島大橋は四〇年以上の時を越えてひっそりとたたずんでいる。私には、この橋が、パイロット事業で沸いた昭和四〇年代、みかんで島の将来を切り開こうとした人々にとっての夢の架け橋だったように思えてならない。

## 楽ノ江

楽ノ江は、採石場と小学校がある集落である。

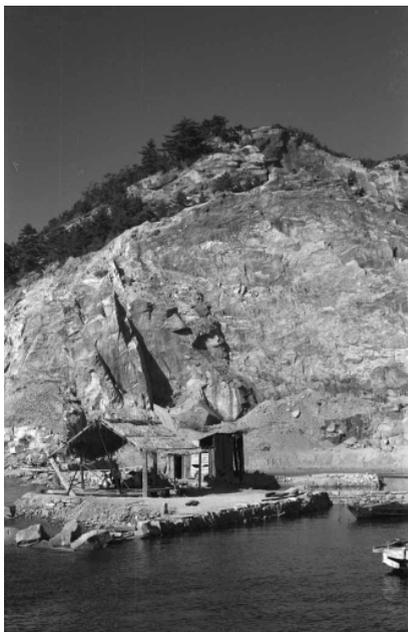
梶田氏の『わたしの浮島風土記』によれば、採石場は、



浮島小学校。昭和32年、現在地に移る。



現在の採石場。石を切る音は今では聞かれず。



楽ノ江の採石場。かつては良質な花崗岩の産地。

明治期に愛媛県越智郡伯方島出身の赤瀬源作という人物によって拓かれたという「※10」。江ノ浦や樽見、頭島にも採石場があったようで「※11」、浮島付近一帯が良質な花崗岩の産地であったことがうかがえる。

宮本は昭和六年、楽ノ江を訪れ日記に次のように記している。

「ラクネは採石場で、家は十軒位。(中略)採石場は高い山の上からとつて来て、今、地平と同じ所どつて居る。山の頂から地平まで百五十尺。…之だけの石をとるには、何年かゝつたか？男がカーンカーンとのみをふるつて居る。その音が、四圍の石壁にひびいて冴えてきこえる。石は御影石だが、頂のほうはもう赤くなつて、その赤い上に青い空が高い」【※12】  
しかし、昭和初期にはすでに、楽ノ江の採石場は斜陽化しつつあったらしい【※13】。明治以降、コンクリートの普及により石材の需要が低下し、戦後まもなく採石場は閉鎖に至ったという【※14】。

昭和三五年（一九六〇）一〇月二六日、宮本は島の振興に関する講演を行うため、楽ノ江の小学校を訪れた。その際、採石場にも足を向け、何点かカメラに収めてい



学校帰りの子供たち。この日は宮本を送る船に同乗して帰る。その表情は皆いきいきとしている。

る。この時、採石場について「コンクリートが発達して、石垣積みもめっきり減り、ここで石を切る音もあまり聞かなくなつた」<sup>※15</sup>と感想を述べている。記述からは、採石場の衰退ぶりが伺えるが、まだこの段階では、細々ながら採石業が営まれていたとも読み取れる。

昭和三五年と比較して、現在の採石場は山の形状が変わり、木々が繁茂している。また、採石場の前には石積みみの船着場が築かれている。採石場麓付近の緑地帯は、頂上部から滑落したものであるという<sup>※16</sup>。写真の左下にかすかに写る作業小屋のような建物が、かすかに往時をしのばせる。

楽ノ江を語る上で、浮島小学校は避けて通れない。同校は、明治六年（一八七三）創立の小学校である。その後、森野村立開蒙小学校江ノ浦分教場↓油良村立油良小学校分校↓島中小学校江ノ浦・樽見分教場の時代を経て、昭和二年（一九二七）島の山頂部である桜の地に校舎が築かれる。宮本は昭和六年の日記で「峠近くに校舎がある。新しい校舎だ。先生が三人居るさうな。不便な所にあるものだ。併し実に見晴らしがいい。恐らく大島郡中第一の眺望のいい学校だらう」<sup>※17</sup>と感想を述べている。

現在の地に移転したのは、昭和三二（一九五七）のことである。先述したように、宮本は講演のため三五年に浮島小学校を訪れている。桜への移転の四年後、楽ノ江への移転の三年後というように、二度とも校舎の移転後まもなく宮本が同校を訪れている。偶然かもしれないが、私には宮本と浮島小学校の間に不思議な縁を感じてしまう。

現校舎は、宮本来訪時から建て替わっており、コンクリート建ての近代的な造りになっている。学校の前には、棧橋が築かれ小型の船舶が係留されていた。

宮本が浮島で撮った写真の中でよく用いられるものに船満載に乗った子供たちの写真がある。

授業を終え、放課後の開放感にひたる児童の生き生きとした表情を捉えた一枚である。この時の出来事について「船には五、六〇人あまりも乗ったであろう」[\*18]と宮本は記している。浮島に渡るひらい丸の船内でたまたま居合わせた子供たちに聞いたところ、平成二五年一月現在、小学校の児童は九名であるという。児童数は、五三年前と比べて大きく減少している。しかし、子供たちにとって今も昔も小学校が大切な学び舎であることに変

わりはない。

## 江ノ浦

江ノ浦は、浮島の南に位置する集落である。宮本は浮島来訪の際、江ノ浦は、ほぼ欠かさず立ち寄っていたようである。

昭和三五年の日記には「江ノ浦の石崎さんのところへいき古文書を見る」[\*19]とあり、翌三六年にも「石崎さんの家へ行って古文書を見せてもらい借ることにする。ミカベ山の裁判関係書」[\*20]と記している。この二回に限っていえば、江ノ浦来訪の目的は、日記にある通り、古文書調査のためであったと考えられる。浮島は、江戸から明治初頭にかけて島の南端にそびえる見壁山の領有をめぐって森村との間で争論が起こった。その詳細は宮本の手によって『東和町誌』の「浮島開作」[\*21]の項にまとめられている。

三九年は樽見を経て徒歩で江ノ浦を訪れている。来訪の目的は不明だが、「江ノ浦で島の有志とはなし」[\*22]とあることから、島の人々との情報交換が目的の一つであったのかもしれない。



道はイリコづくりの干場でもあった。江ノ浦。



アスファルトで舗装された道



昭和39年頃の江ノ浦。手前にはミカンの幼木。



現在は農道が整備され、ミカンの運搬も容易に。

宮本が江ノ浦で撮った写真で私の印象に残ったのは二枚ある。

一枚目は、民家前の砂利道にイリコを天日干しする様子を撮ったものである。現在と違って、車の往来もなかった時代である。梶田氏の記憶によれば、パイロット事業までは「(浮島)開闢以来道路は全て歩行者専用」<sup>※23</sup>であったという。道は移動のためだけに使うものではなく、物干し場としても利用することは、当時の島で暮らす人々にとって当たり前の感覚だったのではなからうか。現在、写真が撮られた辺りは、道がアスファルト舗装になっている。写真右手中央部の家屋は、以前お好み焼き屋だったらしいが今は営業していない。

二枚目は、集落内より磐尾神社の森を臨んだ写真である。昭和三九年の写真からは、手前の畑にみかんの幼木が植えられ、写真正面の山の斜面が畑として開かれていた様子がうかがえる。現在は、頼りなかった幼木が立派に生長し、畑のすぐ横には農道が整備され、みかんの運搬も容易になっているようである。樽見の項でも述べたように、四〇年代のパイロット事業が浮島の農業にとつて大きな転換期であったことは間違いない。しかし、こ

の写真からは、すでにそれ以前から島内でみかん産業への模索が始められていたことが読み取れる。

一見何気ない風景のようであっても、宮本が撮った写真の背後には多くの情報やテーマが含まれている。それは、産業の転換点であったり、人々の暮らしの移り変わりであったりする。時には当時の人々の意識や心情のような、目に映らないものまで感じとれるようなものもある。写真の何に注目するかは人それぞれである。しかし、テーマを持って宮本写真を手に現地を歩けば、何か目に見えてくるものがあるのではないだろうか。

## おわりに

今回は、宮本の足跡をたどりながら、昭和三〇年代の写真を手到现在の島内の各集落を歩いて感じたことを書き綴ってみた。実際現地を歩いて、私の頭の中には浮島を考えるキーワードとして漠然と「採石業」と「パイロット事業」という言葉が浮かんだ。

浮島は、様々な研究テーマを含んだ魅力的なフィールドである。中世の宇賀島衆に始まり、江戸から明治期においては、島の開拓史や森村・浮島間における見壁山の

領有権に関する問題。明治から昭和期にかけては、採石業を梃子にした瀬戸内島嶼間の人々のつながりやみかんのパイロット事業など、研究となりうるテーマを挙げればきりが無い。もし再び浮島を訪れる機会があれば、次回は「採石業」と「パイロット事業」という視点に注目して歩いてみたいと思う。(文化交流センター学芸員)

### 〔脚注〕

※1 山口県公式ウェブサイト

<http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/>

※2

宮本日記から、浮島への訪問が確認できたのは、①昭和六年四月四日、②昭和三五年一〇月二六日、③昭和三六年一〇月二〇日、④昭和三九年一〇月五日の計四回である。これ以外に来訪が考えられるのが、昭和一〇年(一九三五)である。『私の日本地図』周防大島(未来社、二〇〇八年)一二九頁には「そのつぎ(樽見へ)行ったのは昭和一〇年頃であったか」と記している。また、『宮本常一著作集1 民俗学への道』(未来社、一九六八年)一七五〜六頁にも「この年(昭和一〇年)、私は(中略)故里の海に関する生活と習俗

- を書くことにして、夏休みには故里の漁村の調査をした」とある。その時の成果をまとめたものが、『宮本常一著作集 38 周防大島を中心としたる海の生活誌』（未来社、一九九四年）で、本文中にも浮島の記事が見られる。これらの記述から、昭和一〇年に浮島を訪れた可能性は高いと判断し、先述の四回と昭和一〇年の一回を加え「少なくとも五度」という表現を用いた。
- ※3 田村善次郎編『宮本常一日記 青春篇』（毎日新聞社、二〇一二年）三九四～五頁
- ※4 日記内では「浮島」と表記されている。前後の文章から類推するに「浮島」＝江ノ浦の意で用いたと思われる。
- ※5 毎日新聞社編『宮本常一写真・日記集成』上巻（毎日新聞社、二〇〇五年）四六八頁
- ※6 山口県文書館編『防長寺社由来 第一巻』（山口県文書館、一九八二年）三〇頁
- ※7 梶田清七編著『わたしの浮島風土記』（私家版、二〇〇九年）五九頁
- ※8 橘町史編集委員会編著『橘町史』（山口県大島郡橘町、一九八三年）六〇六・六一〇頁
- ※9 財団法人日本離島センター編『SHIMADAS』（財

- 団法人日本離島センター、二〇〇四年）五七五頁
- ※10 前掲『わたしの浮島風土記』六五頁
- ※11 前掲『わたしの浮島風土記』六六頁
- ※12 前掲『宮本常一日記 青春篇』三九四～五頁
- ※13 前掲『わたしの浮島風土記』六六～七頁
- ※14 前掲『わたしの浮島風土記』七〇頁
- ※15 前掲『私の日本地図9 周防大島』一二七頁
- ※16 前掲『わたしの浮島風土記』六五頁
- ※17 前掲『宮本常一日記 青春篇』三九四頁
- ※18 前掲『私の日本地図9 周防大島』一二八頁
- ※19 前掲『宮本常一写真・日記集成上巻』二二三頁
- ※20 前掲『宮本常一写真・日記集成上巻』二九三頁
- ※21 宮本常一・岡本定著『東和町誌』（山口県大島郡東和町、一九八二年）三二二～三五頁
- ※22 前掲『宮本常一写真・日記集成上巻』四六八頁
- ※23 前掲『わたしの浮島風土記』一二四頁
- 〔付記〕
- 本稿で使用したモノクロ写真は全て文化交流センター所蔵の宮本常一撮影写真で、カラー写真は、当館実施の「古写真の

風景をあるく」などの企画の際、筆者及び参加者が撮影したものである。また、本稿の内容は『楠町史』、『わたしの浮島風土記』の記述によるところが大きかったが、煩雑さを避けるため引用部分の脚注は最低限にとどめた。

#### 【交流短信】

四月、学校教育課より周防大島に赴任された先生を対象にして、島内の巡見を実施したいとの話を頂戴した。学校の中だけでなく地域全体を先生方に知って欲しいとのことで、半日のバスツアーを企画しているとのこと。そこで、できるだけ町内を一周しようと服部屋敷、長尾八幡宮、屋代小学校郷土資料館、久賀の石風呂をめぐるというルートに決めた。

巡見当日、長尾八幡宮では宮司の長尾健彦氏に案内いただき、町指定文化財の建築図面や本殿建築当時の写真（大正五年頃）など貴重な資料もみせていただいた。久賀の石風呂は八幡生涯学習のむらの徳毛敦洋氏にお願いをした。

また、少しでも島の資源を生かした教育方法を考える参考になればと思い、学芸員がバスガイドを担当し、バスの車窓から望む山の利用や海岸線、商店街の看板などについて思い浮かぶ蘊蓄（？）を披露した。

学校と博物館・資料館の関係についても本誌を通じて考える機会を持ちたいと思っている。（丁）

## 【周防大島の窓】

### 蜜蜂と時の狭間を

浮遊する



舛田良樹

現役時代は公害問題の対策に係る工場等の汚染排出源調査、それから公害という言葉が使われなくなり環境汚染など環境という言葉が使われ始め環境モニタリング、アセスメントに携わってきた。そして現在では公害という言葉は死語となり快適な環境であるアメニティが使われ始め地球温暖化問題に関わってきた。

その間、趣味として山岳会で自然の気の遠くなるほどの美しさと死の恐怖など身を持って感じながら過ごしてきた。

いつの間にか時が流れ我らの時代は生存可能な平均年齢に近づき「人間とは」などと哲学的な迷走が時期に咲く黄緑の菜の花の如く頭の中の隙間を覆いはじめた。迷走の末、人間とは自然の時の流れの狭間で流れて行かざるを得ないのだ、など仏陀、キリストの高尚な答えとなった。

では、どうしたら時の流れの中で、たゆたうことがで

きるであろうか。

それには、季節を敏感に嗅ぎ分けて自然環境に適応しながら年を繰り返す動植物を育て、その成長する流れに身を置き一緒に過ごすことで、それができるのではないかと勝手な解脱に至り突然行動をおこした。

まず、親が育てていたミカン畑の片隅に野菜や花を植え、その木の下に蜜蜂を飼育しようと養蜂の機材一式、蜜蜂二箱を購入して養蜂の本、片手に手探りでスタートした。

それから迷走の道は立体交差となり纏れ、餌は足りていのだろうか、寒さは、暑さは、等々自分が蜂になったように心配が次から次へと湧き出してくる。何ヶ月か経った後、安下庄に住む養蜂家の情報を得て電話し図々しくも押しかけて無理やり弟子としてもらう。

以来、蜂に変身したごとく時空を浮遊しながら考えた。毎日流れてくるニュースでは感情だけでの殺傷事件、宗教的な争い等を報じている。人間同士が理解できないのに蜂の気持など解るわけがないと、更なる解脱をしたのである。



日本蜜蜂



解脱とともに幻想のごとく前頭葉に浮かんできた「自然界では生けとしものは生き死せるものは死ぬ、これ自然の摂理なり」。自然界では災害等により薄情なほど、あっさりと命を奪う。また、時には不必要なほど命を長らえさせる。それらの思いを基に蜂を観察し知見を得たので次に示す。とは言いながら当然のことである。

蜂は一箱に一匹の女王蜂と二万匹程度の働き蜂である雌蜂で構成されている。働き蜂は二十日間程度の短命で仕事は花から蜜を集める。その量はスプーン一杯程度で、それと花粉を餌として女王蜂の産んだ卵を育てていく。

女王蜂は寿命の短い働き蜂を常時二万匹程度に保つため卵を産み続け群れを維持していかなければならない。

その卵の中から選ばれたものにローヤルゼリーが与えられた女王蜂が成長してゆく。

同時期に雄蜂も数十匹生まれ、これも選ばれたものが女王蜂と交尾し、その後、数十匹の雄蜂は蜜も集めず、のらりくらりとテレビを見ながら酒を飲んでいる。まるで私のようなのである。

新たな女王蜂はやがて働き蜂の半数を連れて、その箱から出て新たな群れを作る。これを分蜂といって養蜂家が蜂の群を増やす手段の一つである。巣を出た女王蜂の群れは元の箱の近辺に球状（蜂球）になって一〜二日間留まる。これを網で取り新しい巣箱に入れて蜂群を増やしてゆく。しかし、蜂球になっている時を見逃すと二度と帰ってこない。

蜂蜜は春と秋の開花時、一箱の働き蜂が二万匹とするとして一匹がスプーン一杯、約一ミリリットル集めたとして二万ミリリットルつまりに二十リットルとなる。その貴重な蜜は人間により採取される。

問題は越冬である。蜜を取られた女王蜂と越冬のため数千匹に縮小した働き蜂で慎ましく冬季を乗り切る。その餌として砂糖水が与えられることになる。欲な人間が

冬用の蜜まで取りkg、百五十円程度の砂糖を餌の代用として誤魔化すからである。真つ当な人間のすることではないなどと立ち上がった。別に立ち上がることはないのだが越冬を十分な蜜で過ごしてもらおうと秋の採取量を控え餌として残すこととした。

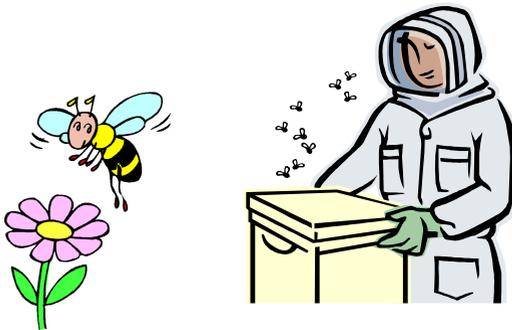
とは言いながら九十%程度も採取するのが誤魔化してないのかと問われれば少々心苦しい。

巣箱の中のようなすは冬期には自分たちが巣と巣の間をプロポリスで覆い隙間風と放熱を防いで寒さに対応する。夏期は入口付近に集まって羽ばたき、風を巣箱に送り込み暑さをしのぐ。要するに蜂が自然環境に出来る範囲で対応し生き延びるのである。人間もエアコン等に頼らないうで自然環境に適応して昔の知恵を利用する生活しなければ僅かな地球的規模の気温変動で絶滅するのではなからうか。

これらから養蜂は意外とスムーズにできそうだが、その間には蜜蜂に目の近辺を刺され目の前が霧に覆われたように白っぽく見え始めて病院に担ぎこまれたりスズメバチに2回(2回目は人命に関わるらしい)も刺され悶え苦しんだりした。いずれも私の不注意から起こったこ

とで蜂たちには罪はない。

どこかの冒険家が言っていた「冒険は九十パーセントの苦しみと十パーセントの喜びからなる」山登りをしていたので気持ちにはよくわかる。人生も似たようなものはなからうか。



【書誌紹介】

〈水をめぐる江戸時代の地域像〉

渡辺尚志『百姓たちの水資源戦争』（草思社、二〇一四年）



自然と人間の関わりをもう一度考えようとする出版が相次いでいて、それらに共通するのは先人たちの知恵を見直してみようという試みである。

本書もまた江戸時代を中心に田畑に水を引き込む「用水」の問題に注目しながら自然と人間の関係を見つめている。

第一部は江戸時代の用水（川）管理のあり方を概観する総論になっている。治水の技術、用水路の維持管理、そして利害対立の調整、さらに漁労や水運など川の多様な利用法をめぐる問題に言及する。タイトルには「水資源戦争」という強い言葉が使われている。だが、その中味は有限な資源について人びとが利害対立を調整しながら解決へと向かう営みに関心が払われている。

第二部は、ケーススタディとして河内地方（現在の大阪府藤井寺市）の村々の利水・治水のあり方を古文書（特

に水争論文書）の分析を通じて描き出す。一六世紀～二〇世紀初頭までの約三〇〇年という永いスパンで水問題を見ていくことで、①利害対立が生じた際の領主権力の関わり方の変遷、②慣習主義と「百姓成り立ち」（暮らしを成り立たせる）といった論理の形成、③記憶から記録（口碑から文書主義）への移り変わり、さらに④明治維新时期における近代法治主義の形成の流入など、村落の重要な意志決定の歴史的な変遷を明らかにしている。

講演録のような簡潔な叙述、史料の現代語訳など歴史に関心の薄い人でも十分に楽しめるように工夫されている。江戸時代の農村といえば権力に抑圧されるイメージがまだまだ強いだろうが、本書では自治の意識が高く、問題解決への知恵と技術を身につけた人びとの姿が描き出されている。長年にわたり庄屋などの「中間層」を実証的に研究してきた著者の面目躍如といったところだろう。

著者が、「多面的で直接川と向き合うこと」によって、百姓たちは川についての知識と技術を磨くことができました。自然の圧倒的な力と対峙することで人格を鍛え、さまざまな生活の知恵を獲得したのです。それに対して、

現代人は（中略）手を汚さない自由な時間を増やした代償として、自然との共生の技法を創造する貴重な機会を失ってしまったのではないでしょうか」と警鐘を鳴らしている点にも本書の現代的意義を感じる。（高木）

〈史上、村上水軍が最も輝いた戦いを描く〉

和田竜『村上海賊の娘』上・下巻（新潮社、二〇一三年）



本書は、「本屋大賞二〇一四」の大賞を受賞した話題の歴史小説である。

村上水軍を全盛期に導いた村上武吉の娘・景（きょう）を主人公に、

天正四年（一五七六）に織田方と毛利方で行われた第一次木津川口合戦を描いた作品である。幼い頃から瀬戸内の急流にもまれ、粗野な海賊たちに囲まれ生まれ育った景は、男勝りな性格で己の武芸にも自信を持ち、いつか戦に出ることを夢に見ていた。

天正元年（一五七三）に信長により將軍職を追われた

足利義昭は、中国地方の大大名であった毛利氏庇護の下、幕府再興を各地の反信長勢力に訴える。この動きに呼応した本願寺は、本拠・石山に籠城し、信長に反旗を翻した。信長はすぐさま軍勢を派遣し、包圍戦を展開する。

そんな中、景は、本願寺の決起に迎え、石山行きを決意した安芸門徒の一行を大坂まで送り届けることとなる。しかし、そこで彼女を待ち受けていたのは、血みどろの争いを続ける織田軍と門徒衆の姿であり、人間としても海賊としても器の大きい泉州海賊の将・真鍋七五三兵衛（まなべしめのひょうえ）との出会いであった。現実を知った景は、自分がいかに「井の中の蛙」であったかを感じ知らされることとなる。

失意のうち、彼女は故郷の能島に戻るが、それから間もなく、毛利氏より村上水軍に本願寺への兵糧搬入の要請が届く。これは、毛利氏が、織田軍の包圍作戦により、兵糧に困窮した本願寺からの兵糧運び入れ要求に 대응するためであった。天正四年七月。兵糧搬入の使命を負う村上氏を主力とする毛利水軍とそれを阻止しようとする織田方の水軍との間でついに戦端が開かれることとなる。

そんな時、人生の挫折を味わった景が取った行動は……？

本作の魅力は、数々の個性豊かなキャラクターや戦における虚々々々の心理的なかげひき、そして物語全般に散りばめられている生き生きとした戦闘シーンの描写にある。特にクライマックスの景と七五三兵衛の戦いを描いた場面は、臨場感たっぷりです。読者をひきつける。

巻末には多くの参考文献が挙げられている。和田氏は、物語を書く上で事前に膨大な史料を丹念に読み込んでいく。それは作中で度々登場する史料の引用からも裏付けられる。史料を効果的に用いながら物語に厚みを持たせるスタイルは、デビュー作『のぼうの城』（小学館、二〇〇七年）以来貫かれており、本作でもその手法が遺憾なく発揮されている。

作品に登場する景の父である武吉や兄の元吉・景親は周防大島にも関わりが深い。和田地区は、武吉終焉の地で、景親の子孫（村上一学家）の領地もあつた。また、屋代地区には、かつて元吉の子孫（村上図書家）の領地があり、村上家の菩提寺・龍心寺もこの地にある。町内では昨年度、村上水軍研究会より「周防大島町村上水軍の史跡」と題したパンフレットも作成されている。

中世の瀬戸内海や周防大島を考える上で、村上水軍は

避けては通れないテーマである。しかし、これから水軍について学ぼうとする人でも、いきなり専門書を手にするのは気が重いかもしれない。そんな人には、まず本書のような歴史小説から、かつて瀬戸内海を縦横無尽に駆けめぐった村上水軍の息吹を感じとっていただきたい。

（山根）

【活動記録】

周防大島文化交流センター日誌

(平成二六年一月～四月)

【一月】

- ・五日 企画展「宮本常一と岡本太郎」ギャラリートーク (高木説明)
- ・一三日 地域交流員企画「ダイガラ臼を使った餅つき体験」／九時三〇～一三時、参加者五六名
- ・一七日 和田小学校三年生来館 (三名) ／一〇時三〇～一一時三〇、高木が館内説明・東和收藏庫を案内
- ・二〇日 「宮本常一が撮った写真を調べるコンクール」入賞作品展示／主催・周防大島町教育委員会 (二月二日まで)
- ・二二日 定期清掃日／資料保存を目的として書庫および展示室等の清掃作業
- ・二五日 福山市公民館長会来館 (四九名) ／一四時～一五時二〇、高木が館内説明
- ・二六日 企画展「宮本常一と岡本太郎」ギャラリートーク (高木説明)

【二月】

- ・六日 下松市女性団体連絡協議会来町 (二二名) ／一三時二〇～一四時、山根が服部屋敷を案内
- ・七日 NHK広島・森田氏来館／山根が館内説明、資料レファレンス対応
- ・九日 地域交流談話会／文化交流センター研修室、一〇時～一一時三〇、地域交流員報告「中国山地のまちあるき」(報告者・岡村弘子)、「民具の収集・整理・保存」(報告者・高木)
- 「古写真の風景をあるく」和田／一三時三〇～一七時
- ・二〇日 安芸高田市市民グループ来館 (八名) ／一四時～一五時三〇、高木館内説明・レファレンス対応
- ・二四日 森野小学校来館／一三時一五～一四時一五、高木館内説明
- ・二六日 周防大島文化交流講座 (第二回) ／一四時～一六時、文化交流センター研修室
- 講師・高橋啓一氏 (滋賀県立琵琶湖博物館・上席総括学芸員) 「博物館の「木」から地域

の「森」へ」

・一七日 東海大学・杉本氏来館、山根・高木が館内説明・レファレンス対応

・一六日 浮島小学校・加峰氏来館、高木がレファレンス対応

・一九日 定期清掃日／資料保存を目的として書庫および展示室等の清掃作業

・二一日 体験型観光講習会／九時三〇～一二時、久賀防災センター、山根出席

・二五日 地域巡回写真展準備／一〇時～一二時、西方集会場にて写真についての聞き書き（高木・山根）

【三月】

・一日 東和図書室祭り／一〇時～一四時、地域交流員企画写真展示「私の好きな周防大島二〇一三」ほか。

・八日 地域巡回写真展（西方）／九時～一〇時、西方集会所西方コミュニティカフェ

シンポジウム「宮本常一写真による瀬戸内文化研究」／一三時三〇～一六時、八幡生涯学

・九日 習のむら、報告者・印南敏秀（愛知大学）、佐竹昭（広島大学）、コメンテーター・高木泰伸  
地域交流談話会／一〇時～一一時三〇、地域

交流員報告「古道をあるく」（報告者・藤本）、  
「古写真調査―和田―」（報告者・友森ほか）  
「古写真の風景をあるく」伊保田・雨振・  
両源田／一三時三〇～一七時

・二〇日 城山小学校三年生来館（一〇名）／九時三〇～一〇時一五分、山根館内説明

・二一日 呉市史編さん室・市川氏来館、高木館内説明・レファレンス対応

・二七日 離島巡回展準備／高木、離島巡回展のため長崎県小値賀町出張、同町学芸員・平田氏と打合せ（一九日まで）

・二六日 定期清掃日／資料保存を目的として書庫および展示室等の清掃作業

・二七日 地域巡回写真展準備／福田忠邦氏来館

・三一日 『宮本常一農漁村探訪録』16 刊行、編集：田村善次郎・山根一史

【四月】

- ・五日 地域巡回写真展（油宇）／油宇公民館、老人クラブ総会、九時～一四時  
神戸大学・隅杏奈氏、芸北民俗芸能保存伝承館・松井今日子氏来館／高木・山根館内説明、レファレンス対応
- ・一〇日 安芸太田町郷土史研究会来館（二三名）／一  
一時三〇～一二時三〇、山根館内説明
- ・一二日 広島民俗学会・正本眞理子氏来館／高木館内  
説明・レファレンス対応
- ・一三日 地域交流談話会／一〇時～一一時三〇分、交  
流員報告「古写真調査」伊保田（報告者・  
友森ほか）
- ・二〇日 農業体験・タケノコ掘りとトウモロコシの種  
蒔き／一四時～一六時、なぎさクラブと共催
- ・三〇日 定期清掃日／資料保存を目的として書庫およ  
び展示室等の清掃作業

## 【編集後記】

『文化と交流』NO. 3をお届けします。本号では、開館十周年にあたり、地域と博物館・博物館の関係を考える特集を企画しました。また、佐竹昭氏・道岡尚生氏から宮本常一の倉橋での足跡に関する論考をご寄稿いただきました。これからも様々な活動を通じて両氏との連携を深めていければと思います。

地域交流員の舛田氏から蜜蜂の飼育から考えられた手記をご寄稿いただきました。

いずれも力作ですので、ご賞読いただければ幸いです。今回は図らずも特集と論考で宮本常一写真を多く使用していただき、宮本写真の活用の幅はますます広がっていること感じました。周防大島を中心とした瀬戸内地域、あるいは日本全体の、人の営みについて今後もこの『文化と交流』を通じて記録・蓄積していきたいと思っておりますので、ぜひお気軽にご寄稿ください。

(編集担当・高木泰伸)

※『文化と交流』は、左記の周防大島文化交流センターのホームページからダウンロードできます。

<http://www.towatown.jp/koryu-center/koryu.html>

文化と交流 NO. 3

二〇一四年六月三〇日 発行

編集 周防大島文化交流センター

発行 周防大島文化交流センター

〒七四二―二五一一

山口県大島郡周防大島町

平野四一七一―

電話・FAX

〇八二〇（七八）二五一四

【機関誌『文化と交流』に関する投稿規定】

- (一) 投稿できる者は、周防大島文化交流センターおよび周防大島町に所属する者（学芸員・町職員・地域交流員）および編集担当が許可した者に限る。
- (二) 投稿原稿は原則として日本語に限る。
- (三) 投稿原稿は、周防大島をはじめ農山漁村の生活や環境、および周防大島文化交流センターもしくは周防大島町が所蔵する資料に関連したものを主題としていることが望ましい。ただし、編集担当が適当と判断したものは受け付ける。
- (四) 原稿の字数は原則として八〇〇〇字を上限とする。ただし、編集担当が適当と判断した場合にはこの限りでない。
- (五) ワードプロ原稿で投稿される場合は、A4版、三〇字×四〇行、縦書きで作成し、印刷原稿とデータを提出すること。手書きの場合には一マス一字、縦書き、楷書で作成すること。また写真・図版・表などを挿入する場合には必ずデジタルデータ化したものを提出すること。
- (六) 投稿された原稿は、編集担当、または編集担当が指名するオブザーバーによって審査し、できるだけ早く採否を通知する。
- (七) 掲載原稿の著者本人による転載はこれを妨げない。ただし、周防大島文化交流センターへの届け出を必要とする。第三者が転載を希望する場合には著者本人への許諾を得るものとする。
- (八) 本誌に発表された論考等の著作権は、周防大島文化交流センターに帰属する。
- (九) 学術研究および教育目的で本誌の複写を行うことは妨げない。ただし、複製品を第三者が営利を目的として販売することはこれを禁ずる。